

# 英 文 学 会 誌

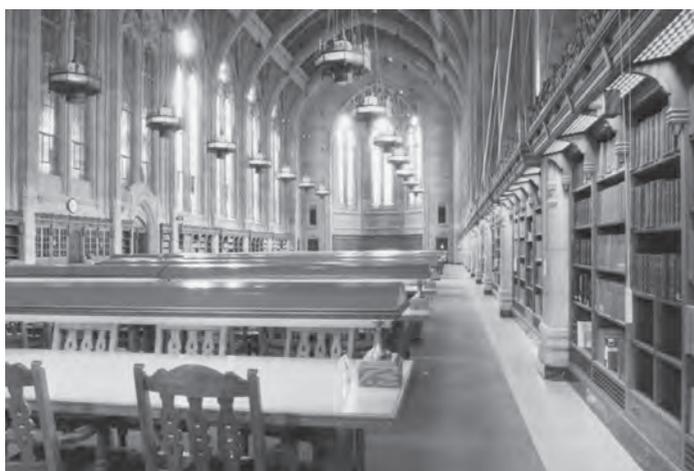
第41号

2012年度

## 目次

顕微鏡的想像力の系譜 (2) —サー・ジョシュア・レノルズからウィリアム・ブレイクへ— ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
鈴木雅之	
Increasing Comprehensible Input through Extensive Reading: A Case Study ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	29
John Wiltshier	
『ピラヴィド』における白人と黒人の絆 —エイミーとセテ、デンヴァー、ピラヴィド—	41
高橋晶子	
珈琲とアメリカ文学——気まぐれな散歩 (26) 『ザ・ヒッピー』を読む ・・・・・・・・・・・・・・・・	55
本田康典	
英文学科生の活動	
Microsoft Office Specialist ・・・・・・・・	66
3年 沢田千咲	
English Speaking Lounge ・・・・・・・・	68
1年 黒石めぐみ      2年 田中里奈 3年 鎌田 光      4年 砥石梨永	
海外長期留学報告 ・・・・・・・・	71
ウィニベグ大学      3年 安部寿理 ハイデルバーグ大学      3年 眞田佳苗	
Overseas Study (イギリス研修) 報告 ・・・・・・・・	76
3年 安孫子悠紀      3年 石澤佳奈	
2012年度英文学科活動報告	
基礎セミナー紹介 ・・・・・・・・	81
教員研究・教育活動報告 ・・・・・・・・	85
英文学科・英語英米文学専攻講義題目 ・・・・・・・・	95
卒業論文・修士論文題目 ・・・・・・・・	99
TOEIC ・・・・・・・・	103
編集後記 ・・・・・・・・	113

# 2012年度 論文・エッセイ



## 顕微鏡的想像力の系譜 (2)

—サー・ジョシュア・レノルズからウィリアム・ブレイクへ—<sup>1</sup>

鈴木 雅之

顕微鏡は、人間の肉眼による視力を補強する拡大作用によって、ルネッサンス期以来の事物にまつわる想像的象徴性を剥ぎ取った。顕微鏡という光学補助器具は、ベイコンの実験観察方法にもとづく近代生物学なかでも解剖学や生理学、博物学などの成立と革新に大きく貢献をすることになる。

本稿の目的は、1665年に出版されたロバート・フック (Robert Hooke, 1635–1703) の『ミクログラフィア、あるいは拡大鏡による微生物の生理学的記述』 (*Micrographia: or Some Physiological Descriptions of Minute Bodies Made by Magnifying Glasses, with Observations and Inquiries Thereupon*). 以



図1 ロバート・フックが利用した顕微鏡 (Schem. 1, 1665)

<sup>1</sup> 本稿は、日本シェリー研究センターでの講演「顕微鏡とイギリス・ロマン主義文化」(東京大学山の上会館、2008年12月)をもとに大幅に改訂したものである。

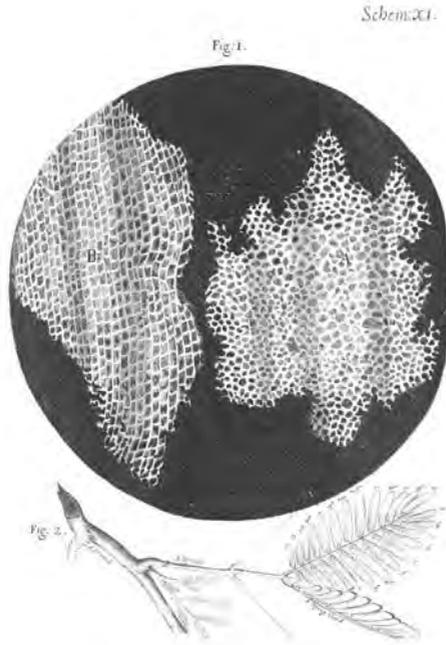


図2 観察図 11 コルクの組織構造およびその細胞  
(cell) (Schem. xi, M115, 1665)

下『ミクログラフィア』図 1, 2)<sup>2</sup>を発信源・源泉とする、肉眼では捉え難い微細なものを見ることのできる「顕微鏡的眼」(microscopic eye)が、18–19 世紀英国の文学や美術(絵画論、美術批評)などにおいてどのように受容されたかを、顕微鏡から派生した多様な言説に辿ることである。とくに、顕微鏡的眼が、17 世紀の具体的な近代生物学の現場を離れて、詩人や画家たちに受け継がれやがて 19 世紀初頭には隠喩化するや制度化する

<sup>2</sup> Robert Hooke, *Micrographia: or Some Physiological Descriptions of Minute Bodies Made by Magnifying Glasses, with Observations and Inquiries Thereupon* (1665; Illinois: Science Heritage, 1987). A Facsimile Edition. The History of Microscopy Series. M と略記。

されていく過程を明らかにしたい。その派生的言説、より正確には反顕微鏡的言説のひとつとして、初代王立美術館長サー・ジョシュア・レノルズ (Sir Joshua Reynolds, 1723–1792) の『美術講義』 (*Discourses on Art*, 1769–1790) がある<sup>3</sup>。

顕微鏡的眼が、そもそも如何なる科学的・政治的・宗教的文脈において誕生したかは知らなくとも、ロマン主義時代以降の人たちにとって顕微鏡的眼は、すでに彼らの文化の一部となっていたのではないか。ロマン主義時代の詩人たちは、しばしば「ヴィジョンを見る詩人たち」 (Visionary Company) と呼ばれるが<sup>4</sup>、彼らにとって見ること、例えば、「幻視」のレトリックは、すでに無意識のうちであれ、顕微鏡的眼と深く絡み合っていたのではないか。少なくとも、ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757–1827) にあってはそう言えるだろうし、ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770–1850) の「時の点」 (spots of time) にも顕微鏡的眼は、その姿を変えて影をおとしているのではないかと考える。

以下の論考において、『美術講義』に見えるレノルズの微細な「個別」 (particularities, *DA* IV :57) に対する激しい呪詛と嫌悪の背後に、強烈な反顕微鏡的言説を読み取り、ブレイクにはロマン主義的顕微鏡言説の変奏を探りたい。

---

<sup>3</sup> *Discourses on Art* からの引用は、*Sir Joshua Reynolds, Discourses on Art*, ed. Robert R. Wark (New Haven: Yale UP, 1997) に依る。*DA* と略記し講義番号と頁数で表す。イギリス文学・文化における顕微鏡的想像力に関する基本的文献を幾つかあげておく。Marjorie Hope Nicolson, *Science and Imagination* (Ithaca: Cornell UP, 1956); Elizabeth Spiller, *Science, Reading, and Renaissance Literature: The Art of Making Knowledge, 1580–1670* (Cambridge: Cambridge UP, 2004); Kevis Goodman, *Georgic, Modernity and British Romanticism: Poetry and the Mediation of History* (Cambridge: Cambridge UP, 2004); Carol T. Christ *The Finer Optic: The Aesthetic of Particularity in Victorian Poetry* (New Haven: Yale UP, 1975) 他。

<sup>4</sup> Harold Bloom, *The Visionary Company: A Reading of English Romantic Poetry* (New York: Doubleday, 1961).

## I. 『ミクログラフィア』におけるふたつのレトリック

アルフレッド・ルパート・ホール (Alfred Rupert Hall) も指摘するように<sup>5</sup>、『ミクログラフィア』最大の特徴にして最大の長所は、芸術的にもいえるほど完成度の高い 118 点からなる観察図にある。『ミクログラフィア』の前年 1664 年に出版されたヘンリー・パワー (Henry Power, 1623–68) の『実験哲学』 (*Experimental Philosophy*) には、僅か 3 点の稚拙な観察図しか掲載されなかったことを思えば、天と地ほどの違いがある<sup>6</sup>。

『実験哲学』の「序文」のなかでパワーは、「屈折光学レンズ」 (Dioptrical Glasses, EPa3) の歴史を辿った後、顕微鏡は近代の誇るべき発明であるという認識を示す。伝統か進歩かという新旧論争では明らかに「新」の立場を擁護するパワーは、顕微鏡を「旧」に対する「新」の優位を、「自然」に対する「人為」の優位を証明するものとして称揚する。望遠鏡の発明は、人間がいかに狭い世界に閉じ込められているかを、人類はひとつの惑星の支配者にすぎないことを教えた (EPa4)。顕微鏡も同様に、肉眼では捉えることのできない微小物の中に未知の新しい宇宙が存在することを示したとパワーは言う。パワーによれば、顕微鏡によって人間は、自らの感覚がおよばない二つの極、つまり自然界における最も巨大な存在と最も微小な存在という両極の間に位置する存在であることを知った (EPb1)。王立協会会員であり原子論者でもあったパワーの「顕微鏡賛歌」 (“In Commendation of the Microscope”, 1661) と題した全 86 行からなる詩のなかでパワーは、顕微鏡という「人工の眼」 (Artificiall eyes, 8) は、「視力の老いた現代」 (6) における「われわれの盲目」 (7) を補強する強力な補助器具であると

<sup>5</sup> A. Rupert Hall, *Hooke's Micrographia 1665–1965* (London: Athlone P, 1966). Christa Knellwolf, “Robert Hooke's *Micrographia* and the Aesthetics of Empiricism”, *The Seventeenth Century* 16.1(2001): 177–200 も参照。

<sup>6</sup> Henry Power, *Experimental Philosophy, in Three Books* (London, 1664). EP と略記。

言う<sup>7</sup>。われわれはすでに墮落した存在であり、裸眼の視力をもってしてもはや不十分である。「人工の眼」は、汚れた視力を補い神の偉大さを確認するために考案されたものであった。「その〔人工の眼の〕拡大する力によってわれわれは、全世界がこれまで見てきた以上のもの」を覗き見る喜びを味わうことができる(9-10)。それはまさに「驚異」を発見する喜びである。神は無価値のもの(ちり)からあらゆるものを創造したが、神は無価値のものよりもさらに微小なものを創った。顕微鏡で見れば、針先の上にも酢一滴のなかに含まれるものと同じ位多くのものが存在することがわかるだろう(65-70)。さらに「顕微鏡賛歌」の中で、パワーは、「あらゆるもののなかで最も微小な物においてこそ神はもっとも偉大である。それゆえわれわれは、極微小な刻印のなかに神の全能を最もよく読み取ることが出来る」(72-74)<sup>8</sup>と断言する。

『実験哲学』のなかでパワーは、顕微鏡をもたず「裸眼・肉眼」(Natural Vision, *EPa5*)に頼るしかなかった「感覚の息子たち」(those sons of sense, *EPa4*)は、微小な物が如何に精巧に造られているかを、また微小な生物のなかにこそ神の偉大さと栄光が潜んでいることを知り得なかった(*EPa3*)と書く。このような思想は、神=創造者への大いなる賛歌であり、顕微鏡文化を支える最も重要な思想的基盤のひとつである。まさに神は細部に宿り給う。

「極微小」(the minutest things, *EPa4*)とパワーが呼んだものをフックは、『ミクログラフィア』「序文」(The Preface)のなかで「個別」(Particulars, *Ma3*)と言い換える。そして、ベイコン的思想を背景にしてフックは、「哲学の刷新」(a reformation in Philosophy, *M4*)を主張する<sup>9</sup>。フックによれば、

<sup>7</sup> Powerによる「顕微鏡賛歌」の草稿が大英図書館で発見され公表された。Thomas Cowles, "Dr Henry Power's Poem on the Microscope", *Isis* xxi (1934): 71-80.

<sup>8</sup> 引用箇所原文は次の通り。"how God is [the] greatest in ye Least of things /And in the smallest print wee gather hence/ the world may Best reade his omnipotence".

<sup>9</sup> "a reformation in Philosophy"に関して、Michael Aaron Dennisは、哲学の刷新とプロテスタント

これまでのスコラ的自然科学は余りにも「頭と空想」(Mb)の産物でありすぎた。今日必要なのは、「誠実な手と忠実な眼」(a sincere Hand, and a faithful Eye, Ma4)によって「事物そのものをあるがままに吟味し記録すること」(Ma4)である。「物質と明らかな事物のもっとも分かり易くもっとも健全な観察に戻るべきときがきたのだ」。そのことが「精神の普遍的治療」(universal cure of the Mind, Mb2)に繋がるとフックは主張した。フランシス・ベイコン (Francis Bacon, 1561–1626) は、観察と帰納法にもとづく自然研究を提唱し、その研究は人間に有用なものでなくてはならないと説き、科学の真の合法的な目的は、新しい発見と新しく獲得した力によって人間の生活を豊かにする事にあると考えた。その結果、人間は創造されたときに持っていたはずの力を回復することが出来るという。このような文脈において、次の引用は、『ミクログラフィア』のなかでもっとも重要な一節である。

恐らく多様な形や様々な美点と美質から、それらの性質・用途あるいは諸々の力についていかなる情報が入手可能であるかを、余裕のある人が確かめることは大いに意味あることだろう。アダムがそのような凝視を通してあらゆる生き物に名前を与えなかったとは、誰にも言い切れない。少なくとも、アダムがつけた名前に生き物の性質（アダムはその性質に名前を与えたのだ）の意義が幾ばくかでもある、(根拠は何であれ) 多くの人々はそう考える。創造主自らがそのような性質をもつ生き物にもっとも神秘的な意図と熟慮とを書き込み刻印したことを読み取る能力が、(勤

---

革命 (Protestant Reformation) の実現とを結びつける。Dennisによれば Hookeの野心は、古代哲学とは一線を画す実験哲学を創始すること、宗教革命同様に、新哲学は、制度や解釈実践 (interpretive practices) を変えることにあったと述べている。Michael Aaron Dennis, "Graphic Understanding: Instruments and Interpretation in Robert Hooke's *Micrographia*", *Science in Context* 3.2 (Autumn 1989): 309–364, esp. 311–313.

勉さに助けられた) 人間に与えられなかったと、果たして断言できるものがあるだろうか。

(観察 29、タチジャコウソウの種子、M154)

フックによれば観察図の持つ意義は、訓練された観察者が持つ知識の技術的・宗教的・政治的力にあるという。上記引用箇所の中かで、『ミクログラフィア』という題名の由来を解説するフックは、人間の視力を補助するレンズと特権的な表象である観察図は「精神の普遍的治癒」をもたらすと説く。完璧な五感をもつアダムは、神の文字——つまり「小さな絵文字」(micrographia) ——を読むことで、すべての生き物に名前を与えた。われわれ人間もこれらの文字と絵を読むことは可能だが、そのためには新しい視覚補助器具の協力を得て、人間の視力を墮落以前の状態に戻す必要がある。人々がこれまで自然の中に神の全能の証拠を読み取ったように、訓練を受けた顕微鏡観察者たちは、神の文字と絵を読み取りそれが神の刻印であると理解することができる。何故ならば、「もっとも神秘的な意図と熟慮」(M154) が事物そのものに「刻まれて」(M154) あるのだから。アダムは「見て知った」ように、人間もまた顕微鏡や望遠鏡を改善し形の再生産について理解を深めることにより、アダムのように「見て知る」ことができるだろう。人間が神の文字と絵を読み取ることができるようになること、それが『ミクログラフィア』の大きな目的のひとつであった。『顕微鏡論』(*Essays on the Microscope*, 1787) を書いたジョージ・アダムズ・ジュニア (George Adams, Jr., 1750–1795) も、顕微鏡は神の力に抗うものではなく人間に神の偉大さをより強く確信させるものであると説いた<sup>10</sup>。

『ミクログラフィア』には、ふたつの顕微鏡的表象のレトリックが潜む。そのひとつが「レンズのレトリック」であり、もうひとつは「博物学的表

<sup>10</sup> George Adams, Jr., *Essays on the Microscope* (London: 1787) 25.

象のレトリック」である<sup>11</sup>。これらふたつのレトリックは、当然のことながら、明確に二分できるものではなく互いに重なり合う。「レンズのレトリック」は、「個別と普遍」(particular vs. general)のダイナミックな相関関係という、プラトン(Plato, 427?-347B.C.)やアリストテレス(Aristotle, 384-322B.C.)以来、ジョン・ドライデン(John Dryden, 1631-1700)からヨハン・ウォルフガング・フォン・ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)にいたる18世紀芸術理論と実践における切迫した問題でもあった。「普遍と特殊の関係は古典主義美学の基本的中心概念であった」と、エルンスト・カッシーラ(Ernst Cassirer)も書いている<sup>12</sup>。自然界が与える情報は「あらゆる理性的人間に判読可能な真に普遍的な文字」(true universal characters legible to all rational men)<sup>13</sup>、つまり解読可能な普遍的メッセージが刻印された貴重な資料であるとフックは考えた。このことは、非身体的視覚つまり「顕微鏡レンズ」の力を借りて初めて可能になる。パワー同様、フックにとっても、レンズという最新のテクノロジーに頼らない「肉眼」(naked eye [Md4]; Natural eyes [EP155]; vulgar Eyes<sup>14</sup>)主義者たちは、実は「事物の視覚的効果と残滓を眺めているにすぎない」(EP193)。肉眼主義を信奉する「感覚の息子たち」には、眼に見えるものの本当の原因を突き止めることはできないのだ。一方自然という書物を読むヴァーチュオーソは、「忠実な眼」=レンズという非身体的器具を装備した視覚を持つ

<sup>11</sup> 詳しくは、拙稿『「誠実な手と忠実な眼」—顕微鏡的眼の方法序説』『英文学評論』第80集(2008): 1-36参照。

<sup>12</sup> エルンスト・カッシーラ『啓蒙主義の哲学』中野好之訳(紀伊國屋書店、1962)356頁。“particular vs. general”に関する文献は膨大であるが、ここでは次の1点のみを挙げておく。Scott Elledge, “The Background and Development in English Criticism of the Theories of Generality and Particularity”, *PMLA* LXII (1947): 147-182.

<sup>13</sup> *The Posthumous Works of Robert Hooke, with a New Introduction by Richard S. Westfall*, ed. Richard Westfall (New York: Johnson Reprint, 1969) 449.

<sup>14</sup> Benjamin Martin, *Micrographia Nova: or, A New Treatise on the Microscope, and Microscopic Objects* (Reading: 1742) v. MNと略記。

ことにより、肉眼には不可視な微小の文字を読むことができる。フックにあってはレンズの透明性は強調されるものの、表象と媒介性が孕む問題群はまだ十分に意識化されていない。

「博物学的表象のレトリック」とは何か。『ミクログラフィア』のモットー「誠実な手と忠実な眼」の手とは、絵筆（ペンシル）と筆（ペン）を持つ手のことだろう。それは、「顕微鏡レンズ」の向こうに見える実験観察対象物に関する情報を視覚化・図版化するための絵筆を持つ手であり、その視覚情報を観察記録という文字情報に変換する筆を持つ手でもある。詳細な文字による記述と細密で精確な観察図からなる『ミクログラフィア』は、分類と収集を旨とする博物学や植物学に多大な影響を与えた。顕微鏡は博物学・植物学に必須の道具である。パワーは、「チョウの羽根を顕微鏡で見ると、そこに神の絵筆によって描かれた縞模様を見出すことだろう」（EP7）と書いている。『ミクログラフィア』に取り上げられた顕微鏡観察の対象は、鉱物界、植物界、動物界と順番に上にあがっていくように構成されている。つまり被造物すべてを網羅し収集し分類するという方向性をすでに孕んでいる。顕微鏡的眼はカール・フォン・リンネ（Carl von Linné, 1707–78）の分類学と結びついて、博物学・植物学の活動に中心的役割を果たし、シャーロット・スミス（Charlotte Smith, 1749–1806）<sup>15</sup> やジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819–1900）等に受け継がれることになる。

## II. 顕微鏡的眼の隠喩化と制度化—レノルズ

微小な生物のなかにこそ神の偉大さと叡智と栄光が潜んでいるという主

<sup>15</sup> Charlotte Smith と顕微鏡に関しては、拙稿「顕微鏡的想像力の系譜（1）—シャーロット・スミスと植物学」『英文学評論』第76集（2004）：53–76。Kandi Tayebi, “Undermining the Eighteenth-Century Pastoral: Rewriting the Poet’s Relationship to Nature in Charlotte Smith’s Poetry”, *European Romantic Review* 15.1 (March 2004) : 131–150 も参照。



図3 《サー・ジョシュア・レノルズの自画像》(Sir Joshua Reynolds DCL, 1780) 王立美術院蔵、オックスフォード大学博士のガウンをまとい目の前には敬愛するミケランジェロの胸像が置かれている。

張は、神への大いなる賛歌であり顕微鏡文化を支える最も重要な思想的基盤のひとつであると先に述べた。パワーはこの微小物や細部を「極微小」と名づけ、フックはそれを微細な「個別」と呼んだ。このように微小な細部に神を見る顕微鏡的眼は、どのような派生的言説を産んだであろうか。18世紀におけるその代表的な例として、レノルズ(図3)の『美術講義』を取り上げたい<sup>16</sup>。『美術講義』は、レノルズが1769年から1790年までの

<sup>16</sup> *Discourses on Art* と顕微鏡的言説とを比較・検討した論考は筆者の知る限りまだない。

22年間15回にわたり、王立美術院長として美術学生に対して行った講演をまとめたものである。

『美術講義』には、18世紀後半のヨーロッパを代表するアカデミックな美学、カッシーラが述べる「普遍と特殊」の問題が前景化されている。レノルズの「個別」に対する嫌悪は、『美術講義』のほぼ全般に浸透している。例えば、「第11回美術講義」をまとめてレノルズは、「天才とは、原理的に言って、全体を包摂し普遍的観念のみを受け入れるところにある」<sup>17</sup>と述べる。細部と天才とを混同してはならないし、「微細な事柄の巧みな識別とその几帳面な細部描写は、たとえそれがどれほど素晴らしい出来映えであっても、その美術家に天才という性格を与えることにはならない」(DA XI: 192)と断言する。「自然を模倣するふたつの方法」(two modes of imitating nature)<sup>18</sup>があるとレノルズは言う。ひとつは、心の動きに忠実に自然の真理を模倣する方法であり、もうひとつは「眼」に頼る方法である。これらふたつの方法のうち、純粹に眼にのみ頼るやり方はより低級であり、その効果は、実物と見まがうほど細密な描写ではあったとしても、それはいわば「トロンブルイユ効果」に過ぎない。そうした欺瞞は、多くの画家にとって理論上重要とみなされはするものの、結局は、芸術を幼児期の段階に引き戻す要因に過ぎないと主張する。レノルズによれば、細部とは偶発的なものであって理想とはほど遠い。細部は繁殖する醜悪さであり崇高を破壊する要素ともなる。

こうしてレノルズによる可視的世界における物質的特殊性への抜きがたい不信感、『美術講義』の中で絵画における個別—細部—へのはっきりとした嫌悪となって現れる。「第3回美術講義」は、美と歴史画の荘重様

<sup>17</sup> *Sir Joshua Reynolds: Discourses* (Harmondsworth: Penguin, 1992), ed. Pat Rogers, 247.

<sup>18</sup> Sir Joshua Reynolds, *The Literary Works of Sir Joshua Reynolds*, 2 vols. (London: Henry G. Bohn, 1852) 2:352, quoted in Naomi Schor, *Reading in Detail: Aesthetics and the Feminine* (London: Methuen, 1987) 12.

式についての講義である。レノルズは、画学生に向かって、現実のモデルを超えて抽象的な精神的理想に従って描くべきであると説く。

しかし自然界における醜悪なものを、言い換えれば個別的で一般的でないものを見抜く力は、経験によってのみ得られる。美術[絵画]の美と荘重性は、わたしの考えでは、あらゆる奇妙なかたち、局所的な慣習、個別的なものそしてあらゆる種類の細部を乗り越え得るところに存する。(DA III:44)

異常に特殊化された自然とくにそうした人間の身体は、肖像画家レノルズの嫌悪感をかき立てた。レノルズは細部・微細・特殊・個別を排斥する。そのことが最も顕著に伺われるのは同じ「第3回美術講義」である。

自然界においてわたしたちの眼に触れるものすべてには、仔細に吟味すると、傷 (blemishes) や欠損 (defects) があることがわかる。最も美しいかたちですら、そこには何らかの弱点と微細または不完全さ (weakness, minuteness, or imperfection) が備わっている。しかしすべての眼が、そういった傷に気づくわけではない。そういった傷に気づく眼とは、長い間、かたちを瞑想し比較するという習慣をもったことのある眼でなければならない。……彼(画家)の眼は、諸事物の偶発的欠陥や異常増殖物や畸形 (accidental deficiencies, excrescences, and deformities) を、それらの一般的形象と区別することができるので、彼は、そうしたかたちの抽象的理念を、いかなる元のものよりも完全なものに仕上げることができる。(DA III:44-45)

引用箇所が示すように、レノルズによる微細な個別に関する議論は、畸形

学の語彙と比喩に満ちている<sup>19</sup>。「畸形（醜悪なもの）」や「不完全さ」という語は、上記引用箇所を含む3頁中何度も繰り返される。ナオミ・ショア (Naomi Schor) は、レノルズのジェンダー化された言語では細部は女性的なるものとして排斥されていると指摘する<sup>20</sup>。レノルズは、完成した絵画のなかのいわば過剰な細部を、不完全で醜悪なもの、自然という女性的なるものの未修正部分つまり傷や欠損部分として扱う。細部は偶発的なものであり、普遍的形像あるいはかたちの抽象的理念に従属しない限り、醜悪な畸形となる。

芸術や趣味において重要な原理は、「自然の普遍的観念」であり、「画家は自然の不変的で普遍的な観念に注目することによって美を生み出すことが出来る。従って、微細な個別と偶然生じる相違とを凝視するなら、その画家は、普遍的規範からは逸脱して自分の画布を畸形によって穢すことになるに違いない」とレノルズは、『アイドラー』(*The Idler*) の中でも記す<sup>21</sup>。

「醜悪さ・怪物・畸形」は、美に対立するだけでなく「かたち」という理念そのものにも対立するとレノルズは考える。「完璧なかたちは、個別を捨てて普遍的観念のみを保持することによってのみ生み出される」(*DA* IV:57)。レノルズにとって、「醜悪さ・怪物・畸形」つまり「微細な個別」

---

<sup>19</sup> 畸形学 (teratology) や怪物学 (science of monsters) については、Katharine Park, "Unnatural Conceptions: The Study of Monsters in Sixteenth- and Seventeenth-Century France and England, *Past and Present* 92 (1981) : 20-54; Helen Deutsch and Felicity Nussbaum, eds., "defects": *Engendering the Modern Body* (Ann Arbor: U of Michigan P, 2000); Henri-Jacques Stiker, Trans. William Sayers, *A History of Disability* (Ann Arbor: U of Michigan P, 1999) 他。

<sup>20</sup> Schor は "particular" と "femininity" とを連結させて論じる。Schor, 11-22 参照。

<sup>21</sup> Appendix B, Pat Rogers, ed., *Sir Joshua Reynolds: Discourses* (Harmondsworth: Penguin, 1992) 358. 引用箇所の原文は次の通り。"if it has been proved that the Painter, by attending to the invariable and general ideas of Nature, produce beauty, he must, by regarding minute particularities, and accidental discriminations, deviate from the universal rule, and pollute his canvass with deformity" ("The True Idea of Beauty", *The Idler*, No. 82 [November 10, 1759])

とは、単にかたちがないというだけでなく、秩序づけする抽象化によって支配されない不規則な個々の無政府状態のことである。

こうしてレノルズにとり「微細な個別」という細部は、「汚染」となり「怪物」となる。レノルズに大きな影響を与えたサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709–84) も、『ランブラー』(*The Rambler*, 1750–52) の第36番目エッセイのなかで、「詩というものは、ひとつの種を他の種と区別するところのより微細な相違に執着してはいけない。それは、想像力を占有するあの荘重性という飾りのなさ(素朴さ)を失うことになる」と書く<sup>22</sup>。ジョンソンのこの見解は、『ラセラス』(*The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, 1759) 第10章における有名な「詩人の役割」(the business of a poet)をめぐる一節における微細な「個別」である「チューリップの縞」(the streaks of the tulip)と「普遍」である「種」(the species)の対立問題へとつながることは容易に推測できるだろう。

それにしても、細部はすべて「欠損」、「異常増殖物」、「畸形(醜悪なもの)」だとするレノルズの自然観は、先に見たパワーの自然観となんとか離れていることか。確かに、レノルズの言う自然とパワーのそれとがどこまで重なり合うのか、判然としないところがある。美術作品におけるよき秩序に関心のあるレノルズは、自然界の細部(とくにそれがキャンバス上の像に変換された場合)のことを念頭に置いているのではないかとも考えられる。あるいは肖像画家レノルズは、現実のモデルの人間の身体を主として念頭においているのかも知れない。

しかしながら「自然界においてわたしたちの眼に触れるすべてのものには、仔細に吟味すると傷や欠損があることがわかる」と言うレノルズの自然は、アナロジーによって、鉱物界、植物界、動物界と被造物すべてに顕

<sup>22</sup> Reynolds 2:135, quoted in Shor16. 引用箇所の内容は次の通り。“poetry cannot dwell upon the minuter distinctions by which one species differs from another without departing from that simplicity of grandeur which fills the imagination”.

微鏡レンズを向けるパワーやフックの自然とはほぼ重なり合うと見てよいだろう。レノルズは「自然それ自体をあまりに仔細に模倣してはならない」(DA III:41) と言い、そのような画家を「より低級な画家」(the lower painter) または「細部画家」(the minute painter) (DA III:50) と呼んで軽視する。細部を徹底して排除もしくは抑圧し、一般的・普遍的概念のみを扱うべきであると主張するレノルズに対して、パワーやフックらは、細部(個別)の中にこそ神(普遍)がいると言う。先に引用したように、顕微鏡が呈示する自然界の様々なデータは「真に普遍的な文字」であると語ったフックの野心は、微細な個別を普遍へと〈変換〉することにあつた<sup>23</sup>。

レノルズが明確に反顕微鏡的姿勢を示したというわけではない。しかし、反顕微鏡的姿勢を隠さない盟友ジョンソン<sup>24</sup>の存在、顕微鏡的眼は対象物を歪めるものだとしてこれを冷ややかに見たマーガレット・キャベンディッシュ(Margaret Cavendish, 1661–1717)や認識論上の問題から顕微鏡的言説の難点を指摘したジョン・ロック(John Locke, 1632–1704)らの影響も否定できないだろう<sup>25</sup>。またジョージ三世(George III, 1738–1820)の庇護のもとに誕生した王立美術院の学生に向けておこなわれた講義は、当然、王立美術院をめぐる政治的文脈を踏まえて読み解く必要がある。『美術講義』のメッセージは、政治理論の有力な伝統である「シヴィック・ヒューマニズム」(civic humanism)を背景に理解すべきだという指摘がある<sup>26</sup>。絵

<sup>23</sup> Mary Baine Campbell, *Wonder and Science: Imagining Worlds in Early Modern Europe* (Ithaca: Cornell UP, 1999) 188; Tita Chico, “Minute Particulars: Microscopy and Eighteenth-Century Narrative”, *Mosaic* 39.2 (2006) : 134–161, esp. 152.

<sup>24</sup> Clark Emery, “Dr. Johnson on Dr. Hill”, *Modern Language Notes* 64.1 (1949) : 15–18.

<sup>25</sup> Margaret Cavendish, *Observations upon Experimental Philosophy*, ed. Eileen O’Neill (Cambridge: Cambridge UP, 2001) 50; John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, ed. Peter H. Hidditch (Oxford: Oxford UP, 1975) 2:23:12. R. M. Yost, Jr., “Locke’s Rejection of Hypotheses about Sub-Microscopic Events”, *JHI* 12.1 (1951) : 111–130 も参照。

<sup>26</sup> John Barrell, *The Political Theory of Painting from Reynolds to Hazlitt* (New Haven: Yale UP, 1986) を参照。一方で Hooke の主張する “a reformation in Philosophy” には、社会秩序を脅かす可能性

画の主題となる歴史や神話上の出来事をキャンバス上に変換するとき、「芸術家は自分の主題の下位部分はすべて抑制し制御すべきである」(DA IV:59)とレノルズは言う。シヴィック・ヒューマニズムの伝統のなかに『美術講義』を位置づけたエリザベス・A・ボールズ(Elizabeth A. Bohls)は、引用箇所「抑制する」(restrain)や「制限する」(keep under)という言葉に、道徳的・政治的な含みを鋭く嗅ぎとる<sup>27</sup>。絵画の下位部分(細部)、精神の下位部分(感覚)そして国家の下位部分(女性や労働者など)は、全体のヒエラルキーを脅かさないように抑制され制限されなければならないとレノルズは考えた。レノルズにとって個別的なものは分裂を招くのだ。『美術講義』にみなぎる細部への異常なまでの嫌悪感は、「国家と個人の精神と芸術品との間の強力なアナロジーに根ざしている」(Bohls78-79)とボールズは指摘する。一方フックは、レノルズが推奨する瞑想や抽象を避け、あくまでも眼と手を使つての個別的な直接的感覚経験を重視する。フックの微小な細部は、レノルズにとっておそらく秩序を乱す元凶とみなされたに違いない。レノルズの『美術講義』に潜む反顕微鏡的言説の根拠のひとつをここに認めることが出来るかも知れない。パワーの言葉を再度引用しよう——「あらゆるもののなかで最も微小なものにおいてこそ神はもっとも偉大である」。

レノルズの論理思考の矛盾を鋭く指摘したのが、ウィリアム・ハズリット(William Hazlitt, 1778-1830)であった。ハズリットは、『テーブル・トーク』(Table-Talk, 1821-22)<sup>28</sup>以前にも、『チャンピオン』誌(*The Champion*)

---

があったという指摘(Dennis 312)を重く受けとめる必要があるだろう。この問題は稿を改めたい。“civic humanism”に関しては、J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton: Princeton UP, 1975)。

<sup>27</sup> Elizabeth A. Bohls, *Women Travel Writers and the Language of Aesthetics 1716-1818*, (Cambridge: Cambridge UP, 1995) 77.

<sup>28</sup> *Table Talk and Conversations of James Northcote, Esq., R.A.*, in *The Collected Works of William Hazlitt*, ed. A.R. Waller and Arnold Glover with an Introduction by W.E. Henley, vol.6 (New York:

上で、1814年11月27日から1815年1月8日にかけて、幾度となくレノルズをとくに彼の『美術講義』にみられる「偶然のものではなく体系的」な「誤り」<sup>29</sup>を、論理の首尾一貫性の欠如を批判し続けた。『テーブル・トーク』の中には、レノルズを批判するエッセイがふたつ収められている。そのひとつは「サー・ジョシュア・レノルズの美術講義における首尾一貫性の欠如について」(“On Certain Inconsistencies in Sir Joshua Reynolds’s Discourses”)と題され、もうひとつには「同じ主題の続き」(“The same Subject Continued”)という題が付されている。後者のエッセイにおいてハズリットは、上で取り上げたレノルズの『アイドラー』に寄せた文章を俎上に載せる。ハズリットによれば、レノルズが排除しようとした「畸形(醜悪さ)」とは、一般的普遍的規則を侵犯するところに生じるであろうことは誰でも了解することだが、レノルズは、用語の曖昧さを十分理解できないため片方の見解しか受け入れることができないでいる。「レノルズは、荘重さあるいは全体の一般的効果とは、個別的細部を排除することによって生み出されると考える。なぜならば、それらの細部は、ときにはなんら荘重な効果をもたらさないことがあるからであると。そしてレノルズは、このふたつ〔細部と荘重さ〕は相容れないもの、どちらかひとつしかないと考える。これは全く不完全な論理である」(TT131-132)。

こう述べた後でハズリットは、「最大の荘重さは、最大の完璧性、否、細部の顕微鏡的正確さ (a microscopic accuracy of detail) と共存する。自然界がしばしばそうであるように」(TT132)と主張する。ここで注目すべきことは、ハズリットの視点はすでに「普遍」から「個別」へ、さらにそれらの共存へと移行していることだろう。レノルズの『美術講義』にみなぎる細部への嫌悪感、それに対するブレイクの猛烈な反論は、「一般化す

---

McClure, Phillips, 1903). TT と略記。

<sup>29</sup> “Introduction to An Account of Sir Joshua Reynolds’ Discourses”, quoted in Appendix II, Wark, ed. 320.

る奴は愚か者だ。個別化すること、それだけが唯一価値あること」<sup>30</sup> という『美術講義』へのブレイクによるマージナリアにも伺われる。もうひとつわれわれの文脈で重要なことは、ハズリットの「細部の顕微鏡的正確さ」という表現に見られる顕微鏡への言及である。『チャンピオン』誌上でのハズリットによるレノルズ批判の文章にも、何度か「拡大鏡」とか「顕微鏡的」<sup>31</sup> という表現が使われている。このことは、顕微鏡あるいは顕微鏡的眼がひとつの比喩的表現として17世紀のフックらの生物学や細胞病理学の現場を離れて、19世紀初頭においてはすでに美術批判用語として審美学の領域に織り込まれていたことを暗示するだろう。顕微鏡あるいは顕微鏡的眼は、派生的言説として隠喩化＝制度化されていたのである。

### Ⅲ. 「無心のまえぶれ」と顕微鏡的眼 — ブレイク

ブルームは、とくにワーズワス、ブレイク、P・B・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) らに言及しつつ、「彼らには目に見えるものを少なくとも見えにくいものにする傾向がある」と書いている<sup>32</sup>。大雑把な言い方をすれば、イギリス・ロマン主義時代の詩人の多くは、たとえば文字にしてもこれを敬遠し、むしろ不可視で視覚化できない本質を喚起する媒体としての言語とか、あるいは本当の真理はイメージをもたないといった立場を取っていたように思われる。ロマン主義時代の詩人たちにとり視覚

<sup>30</sup> 引用箇所の内容は次の通り。“To Generalize is to be an Idiot To Particularize is the Alone Distinction of Merit”. “To Annotations to *The Works of Sir Joshua Reynolds*” (1798-1809), E641. Blake からの引用は、*The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. David V. Erdman with Commentary by Harold Bloom (1965; Berkeley: U of California P, 1982) に依る。E と頁数で表す。Reynolds への書き込み (マージナリア) に関しては、拙論「レノルズとブレイクのマージナリア」(*ALBION* 56[2010]:46-73) を参照。

<sup>31</sup> “On the Imitation of Nature”, quoted in Wark, ed. 328.

<sup>32</sup> Harold Bloom, “Visionary Cinema of Romantic Poetry”, *The Ringers in the Tower: Studies in Romantic Tradition* (Chicago: U of Chicago P, 1971) 37.

的なものは、どちらかと言えば、否定的な響きをもつものとして低く見られていた。シェリーの「ヒバリに寄せて」(“To a Skylark”, 1820)などは、そのひとつの典型である。シェリーの「ヒバリ」は、詩人の目には「見えない不可視の存在」である(ブルーム風に言えば「見えにくく」される)ことによってその存在感・価値が一層高まるのである。

しかしながらロマン主義時代の詩人たちは、顕微鏡的眼をことさら意識することはなかったにせよ、暗々裡に媒体としてのレンズという比喩に依りながら、レンズの向こう側にある幻や超自然的または啓示的な事象を見たいように見ていたのではなかったか。ロマン主義時代の詩人たちにとってのヴィジョンとは、そのような超自然的幻そのものを意味する一方で、他方、幻(ヴィジョン)を見る眼の在り方(構造)・物の見方のことでもある。ブレイクが、トマス・バッツ宛書簡(To Thomas Butts, 22 November 1802)の中で語った「四重のヴィジョン」(a fourfold vision, E722)の「ヴィジョン」とはそのようなものであった。

個別と普遍のダイナミズムを内包するロマン主義時代の幻視のレトリックは、必ずしも明視に向かわない。むしろ、ブルームも言うように、わざと「見えにくいものにする」方向に向かった。錯覚のレトリックと呼ぶべきかも知れない。「鋭敏な眼」(the curious Sight)<sup>33</sup>というレンズ(顕微鏡的眼)を再配備したヴァーチュオーソの眼が、果たして顕微鏡下の事物をあるがままに読み取る「忠実な眼」であり得たかということである。そこをすでに懸念したフックは、顕微鏡学徒に空想や想像力は不要であると『ミクログラフィア』「序文」に明記したのである<sup>34</sup>。

ロマン主義時代の詩人のなかで顕微鏡や顕微鏡的眼への言及が明らかな

<sup>33</sup> Abraham Cowley, *To the Royal Society* 7:14, in Thomas Sprat, *The History of the Royal Society of London, For the Improving of Natural Knowledge* (4<sup>th</sup> edition; London: Printed for J. Knapton, etc., 1734)

<sup>34</sup> レンズのレトリックを利用した Joseph Addison (1672–1719) と *The Spectator* (1711.3–1712.12) に関しては、拙論「誠実な手と忠実な眼」22–26 参照。

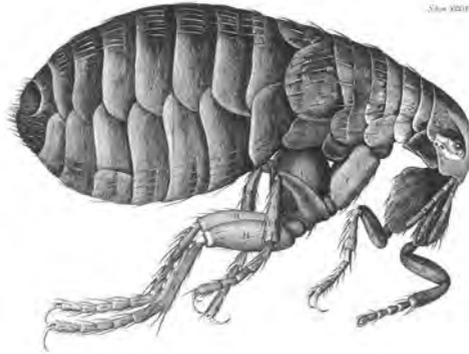


図4 観察図 34 蚤 (Schem. xxxiv, “Flea”, M210-211, 1665)

のは、ブレイクである。『ミクログラフィア』に掲載された観察図の中でも最も忘れ難き「観察図 34 蚤」(Schem xxxiv, “Flea”, M210-211. 図4)、その頭部とウリ二つの頭を持つテンペラ画《蚤の霊》(*The Ghost of a Flea*, c.1819-20) を、ブレイクは残している<sup>35</sup>。同じロマン派詩人でも、例えば、ワーズワスは「精確で顕微鏡的な視力によって入手した素材」は、信頼するに足らない、なぜならそれらの素材は「経験と真実の境界を越えた」ところにあり、そういったものを基にした作品は「偽りの想像力作品」なのだからと言う。一見、顕微鏡的眼へのある種の不信を隠さない<sup>36</sup>。ワーズワスは肉眼派なのかも知れない。反ピクチャレスクの立場を表明したワーズワスは、肉眼を「われわれの五感のうちでもっとも専制主義的」(the most despotic of our senses)<sup>37</sup>と呼んで、ピクチャレスク崇拝を毛嫌いしたこともよく知られている。逆説的ながら、ワーズワスは、不可視性を求め

<sup>35</sup> Blake の図版に関しては、Martin Butlin, ed., *William Blake 1757-1827* (London: Tate Gallery, 1990) 157-160 を見よ。

<sup>36</sup> 引用は、*The Prelude*, 1805 X: 841-848. Wordsworth からの引用は、*The Prelude 1799, 1805, 1850*, ed. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, and Stephen Gill (London: Norton, 1971) に依る。

<sup>37</sup> *Prelude* XI 174[1805]/XII.129[1850].

ほど肉眼に囚われていたということにはならないだろうか<sup>38</sup>。

ブレイクの「無心のまえぶれ」(“Auguries of Innocence”, 1787–1818)の冒頭は、次のように始まる。

一粒の砂にも世界を / そして一輪の野の花にも天国を見る  
ために、 / 手のひらに無限を / そしてひとときに永遠を掴め。

(1–4, E490)<sup>39</sup>

これまで引用最後の2行を多くの研究者は、“Hold”の前に不定詞の“To”を補い“To see”と並列させて解釈してきた。つまり「ひとつぶの砂にも世界を / いちりんの野の花にも天国を見 / きみのたなごごろに無限を / そしてひとときのうちに永遠をとらえる」(寿岳文章訳)という訳が、これまでの定訳であった。しかしこれは正確な訳ではないだろう。“Hold”は命令形と取らなければならない。「無心のまえぶれ」には話し手の意思を表わす“shall”という命令的ニュアンスを含んだ助動詞が多用されている事にも注意を払う必要がある。引用箇所、エマニュエル・スウェーデンボリ(Emanuel Swedenborg, 1688–1772)的思想を読み取り、大宇宙と小宇宙の照応関係を表明したものだとして解釈する学者<sup>40</sup>もいるが、わたしは、上記引用4行には、顕微鏡的眼のふたつのレトリックすなわち「レンズのレトリック」と「博物学的表象のレトリック」が潜んでいると考える。

<sup>38</sup> Wordsworthの“spots of time”にも、具体的な時間と空間とが重層をなす個別的でささやかな事物を起点・原点としながらそこで得た明視を曖昧で見えにくい、複雑で難解なものにする傾向がありそうだ。ピクチャレスクから崇高への〈変換〉と言えるかも知れない。Wim Tigges, ed., *Moments of Moment: Aspects of the Literary Epiphany* (Amsterdam: Rodopi, 1999) には、“spots of time”論も収められている。編者Wim Tiggesは“The Significance of Trivial Things”と題した興味深い序文を寄せている。

<sup>39</sup> 引用箇所の原文は次の通り。“To see a World in a Grain of Sand/And a Heaven in a Wild Flower/ Hold Infinity in the palm of your hand/And Eternity in an hour”.

<sup>40</sup> Mark Schorer, *William Blake: The Politics of Vision* (New York: Henry Holt, 1946) 109.

引用箇所を顕微鏡的眼と関連づける根拠として、「一粒の砂」は17世紀以来の顕微鏡的言説において、極微小のものを指すときには常にサイズの比較対照をするための基準となっていた事を挙げておく。18世紀の顕微鏡学者ヘンリー・ベイカー (Henry Baker, 1698–1774) によれば、顕微鏡実験観察の対象の大きさ (小ささ) を測るときには、砂粒が判断基準となる。これはアントン・フォン・レーウエンフーク (Anton von Leeuwenhoek, 1632–1723) が始めたことであった。ここで言う「砂粒」とは、「粗い海砂」(coarse Sea-Sand) を指す。そのサイズは100粒=1インチである<sup>41</sup>。ちなみに、ベイカーによれば、当時知られている極微小の生き物は、流体のなかに住む微生物 (Animalcules) であり、そのサイズは100万個=1粒の砂であると言う<sup>42</sup>。

「一粒の砂に世界を見る」とは、このような砂粒よりもはるかに微小な生物の充満する世界、「驚異」の世界が顕微鏡下には存在することを知れということであろう。「一輪の野の花」とは、いうまでもなく植物学への言及だろう。植物学にとって拡大鏡や顕微鏡は必須の道具であり、植物学は顕微鏡の改善とともに進歩してきた。花の細部をさらにさらにその細部を覗くこと、あるいは顕微鏡的眼という表現が、植物学の言説ではしばしば繰り返されることは、先に言及したシャーロット・スミスの植物学的作品にも明らかである。「野の花」に「天国」を見るという表現は、例えば、植物と詩を「蒐集」したシャーロット・スミス作品『詩作を始めるための対話』(*Conversations Introducing Poetry: Chiefly on Subjects of Natural History*, 1804)<sup>43</sup>に収められた「野の花」(“Wild Flowers”)と題された54行からなる詩の最後の2行、花のつぼみから落ち葉にいたるまで「[それらは]

<sup>41</sup> Henry Baker, *Microscope Made Easy* (1769; Illinois: Science Heritage, 1987) 41n. A Facsimile Edition. The History of Microscopy Series.

<sup>42</sup> *Microscope Made Easy* 68.

<sup>43</sup> 引用は、Judith Pascoe, ed., *The Works of Charlotte Smith*, Vol.13 (London: Pickering & Chatto, 2007) に依る。

それぞれの仕方で天国の豊かな手 (the bounteous hand of Heaven) について語る」に見て取ることができる。また 1796 年に出版されたプリシラ・ウェイクフィールド (Priscilla Wakefield, 1751–1832) の『植物学入門』(An Introduction to Botany) は、主として女性向けの植物学入門書であるが、「序文」で著者は、「植物学とは、目に見える被造物 (植物) の秩序と調和の中に、神のさまざまな特性を具体的に読み取ることによって、神の特性についての適切な観念を与えるもっとも親しみ深い方法」<sup>44</sup> と述べている。

「一粒の砂にも世界を / 一輪の野の花にも天国を見るために」という表現は、要するに、ブレイクによる顕微鏡文化への勧誘と解釈できないだろうか。顕微鏡文化に参加するためには、具体的個別 (「手のひら」「ひととき」) によって普遍 (「無限」「永遠」) を「掴め」というのである。別な言い方をすると、ここにも「個別」と「普遍」という 18 世紀の哲学的・審美的中心課題のひとつが隠れているように思える。「そしてあらゆる時には巧みに彫り込まれた輝く黄金の門がある」(And every Hour has a bright golden Gate carved with skill, Milton 28:51, E126) という表現では、時間という不可視なものですら「視覚化」「具象化」「個別化」(To Particularize, E641) されている。これらのことは、顕微鏡的眼の言説がブレイクのヴィジョンの方法論にすでに刻み込まれていたことを示すだろう。上で言及したトマス・バッツ宛書簡のなかでもブレイクは、「わたしの外の眼には、わたしの道を遮る一本の薊」だが、「わたしの内の眼にはそれは灰色のひとりの老人だ」と言い、「二重のヴィジョン (double vision) は常にわたしと共にある」と書いていた。レンズを媒介にした顕微鏡的ヴィジョンは、必然的に常に二重のヴィジョンであることを思うとき、ここでもまたブレイクは顕微鏡的言説の中に取り込まれていたことになるだろう。

しかしながら、言うまでもなく、ブレイクは素直に顕微鏡的眼や方法論を信じていたわけではない。「顕微鏡的な視力によって入手した素材」は

<sup>44</sup> Preface, Priscilla Wakefield, *An Introduction to Botany* (London: Printed for E. Newberry, 1796).

信頼するに足らないと語ったワーズワスと同じように、ブレイクも顕微鏡的レンズに絡むまやかしを見抜いていた。『ミルトン』(Milton 29 [31]:15–18, E127) のなかで、ブレイクは次のように書いている。

空虚のなかを廻転する血球がそうであるように、/ 理性ある者の  
眼に映るあのまやかしの像に関して言えば、それはアルロの錯覚  
だ。/ 顕微鏡はこのことに気づいていないし望遠鏡もまた同様で  
ある。/ それらは、観察者の（知覚）器官の比率を変えはするが、  
観察対象そのものを変えることはない。<sup>45</sup>

顕微鏡のレンズは、顕微鏡下の対象物を観察者に大きく見せはするものの、対象物そのものに変化をもたらすわけではないとブレイクは言う。ロックの反顕微鏡的言説に近いものがある。血球がここで登場するのは奇妙に思えるかも知れないが、血球は 17 世紀から 18 世紀における顕微鏡実験観察の定番である<sup>46</sup>。重要なのは、ブレイクのテキストは、顕微鏡を介して、当時の生物学や細胞病理学の言説の場へと必然的に連れ出されずにはおられないという事である。

#### IV. 18 世紀からロマン主義時代へ

確かに 18 世紀からロマン主義時代にかけて、普遍派は、徐々に個別派にその優位を譲って行ったように見える。レノルズを前者の代表とするなら、ブレイクやシャーロット・スミスは後者の代表であろう。しかしなが

<sup>45</sup> 引用箇所の内容は次の通り。“As to that false appearance which appears to the reasoner, /As of a Globe rolling thro Voidness, it is a delusion of Ulro/The Microscope knows not of this nor the Telescope. They alter/ The ratio of the Spectators Organs but leave Objects untouched.”

<sup>46</sup> 例えば、William Hewson, “On the Figure and Composition of the Red Particles of the Blood, Commonly Called the Red Globules”, *Philosophical Transactions* 63 (1773–1774): 303–323.

らレノルズよりも20歳以上も若いジェイムズ・トムソン (James Thomson, 1700–1748) は、すでに『四季』(*The Seasons*, 1726–1730) の「夏」(“Summer”, 288–289)<sup>47</sup> のなかで、「顕微鏡的眼 (the microscopic eye)」をもってしても捉えることができない微細な無数の生命体の群れが、空から舞い降り自然を満たす、と書いていたことは注目に値するだろう。レノルズとほぼ同時代の詩人・文芸批評家ジョゼフ・ウォートン (Joseph Warton, 1722–1800) は、この箇所注目し、反顕微鏡的言説派のひとりであるアレクサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1722–1800) 論の中で次のように書いた。

正当に選択された微細で個別的な (minute and particular) 外界の描写は、詩を歴史から区別するものであり、それ故に前者は、後者よりも自然のより詳細で忠実な表象であると言することができる<sup>48</sup>。

これは、アリストテレスのいう歴史と詩の役割に関する見解——詩は歴史よりも哲学的である、なぜなら、詩は普遍的であるが歴史は個別的であるから——を逆転させたものだ。引用にある「微細で個別的」という表現は、まさにパワーやフックから派生した顕微鏡的語彙であり、それが文学批評に取り入れられたことを示すだろう。実際、「夏」には、他に「裸眼」を意味する「人間の濁った眼」(“The grosser eye of man”, S313) という表現を含む多数の顕微鏡的表現が見える。

個別派か普遍派かという問題は、おそらく個別と普遍のどちらを優位にみるかそのバランスの取り方によるであろう。レノルズの個別排除の論理

<sup>47</sup> 引用は、James Sambrook, ed., *The Seasons and The Castle of Indolence* (Oxford: Clarendon P, 1972) に依る。S と略記。

<sup>48</sup> Joseph Warton, *An Essay on the Genius and Writings of Pope*, 2 vols. (London: 1782) I: 48.

に首尾一貫性が欠如していることを指摘したハズリットは、自然界には個別と普遍が混在・共存していると主張した。また圧倒的な個別派であるブレイクを含む多くのロマン主義時代の詩人たちですら、その背後には、確実に普遍志向があったことを忘れてはならない。

## Increasing Comprehensible Input through Extensive Reading: A Case Study

John Wiltshier

### **Introduction**

Extensive reading (ER) involves reading a large amount of easy-to-understand English. These two factors; amount and level are the key to an effective extensive reading programme that will increase the amount of comprehensible input students receive. The reading level should be easy enough to enable a student to read without using a dictionary. Waring & Takahashi (2000) state that there should be no more than two or three unknown words per page and a student should be able to read the text at a speed of 80~100 words per minute. If students always translate what they are reading they never become smooth, fast readers of English, in fact they never actually learn to read in English at all only to translate sentence by sentence.

Extensive reading in an EFL programme in many respects aims to mirror the process of learning to read in a first language (L1). Initially a child in L1 will read very simple books, perhaps with only one word on a page and gradually progress to read more difficult and longer books. Initially, the books will have appealing pictures to support comprehension, but as a child or a student's reading ability increases such visual support decreases.

### **Why is ER useful for language learning?**

The benefits of extensive reading are manifold and wide-ranging, see Day & Bamford (1998), Hill (2001), Nation (1997), Prowse (2003), Robb (1998),

Waring (1997). From these the biggest benefits to students in Miyagi Gakuin English department are the following four.

1. Extensive reading *provides input of the target language* which, if comprehensible, will lead to intake<sup>1</sup>, whereby unconscious awareness of grammatical structures and the ability to quickly and accurately process sentence structures is built. In order for the input to be comprehensible EFL students should choose books at a level that is easy for them to read without reference to a dictionary. This level can be referred to as i-1 where 'i' is their current English ability level<sup>2</sup>. For most Japanese university students this means starting to read short, very easy-level books.
2. Starting to read at an easy enough level is important as it enables a student to *feel the satisfaction and enjoyment of reading English* without translating. This promotes the learners' positive attitude toward reading and confidence in their ability to read which in turn leads to higher motivation and more reading.
3. Such higher motivation and more reading leads to *improvements in reading fluency* and increased exposure to the target language. Fluent reading allows the reader to move from word-by-word decoding to the processing of ideas, which is essential to higher level reading and thinking skills.
4. Extensive reading *builds vocabulary and improves memory recall* of a word's meanings and its phonological representation. This is due to the nature of story books where vocabulary is naturally recycled. Recycling of language is essential in order to acquire it. The more times a student meets a word

---

<sup>1</sup> For a definition and discussion of 'intake' see Paradis(2009) Chapter 2.

<sup>2</sup> For a definition and discussion of "i" as used by Krashen see Krashen & Terrell(1983), 32-35.

and successfully recalls it the stronger that memory trace becomes. Nation<sup>3</sup> discusses how many repetitions is necessary to learn a word. Estimations vary, but the minimum stated is 6 or 7 times. This will occur naturally and without “learning” effort in a carefully graded ER programme.

### **Important factors in an effective ER programme**

I believe there are four important factors that affect the success and effectiveness of an ER programme; *amount read, comprehension, record-keeping, and interaction/feedback.*

Amount read is the key factor. Simply using graded readers in a class is not extensive reading. A student must read enough to have a positive effect on their overall English ability. So how much is enough? The SSS method (Start with Simple Stories) advocates a target of 300,000 words<sup>4</sup> per year as this is needed in order to gain the benefits listed earlier. However, in Furukawa & Kawate (2003), students are encouraged to try to read 1,000,000 words as reading this amount has been shown to have a significant affect on overall English ability.

The second important factor is comprehension. When students are reading they need to comprehend the meaning of what they are reading. Four common ways to check comprehension are; interviews, book reports, presentations, and online quizzes<sup>5</sup>. Each method has the potential if done properly to check student reading comprehension.

The third important factor in an effective ER programme is record-keeping. Students should keep a record of what they have read and a running total word

<sup>3</sup> For a discussion of the importance of repetition in vocabulary learning see Nation (1990) Chapter 3.

<sup>4</sup> 300,000 words as a minimum is suggested by Akio Furukawa SEG juku founder. <http://groups.yahoo.com/group/ExtensiveReading/message/4786>

<sup>5</sup> See <http://moodlereader.org> for a large number of graded reader online quizzes.

count. This encourages autonomous learning and provides tangible evidence of progress which helps maintain motivation. In addition, if the programme is in an educational institution where grades are given, the teacher needs to track how much is being read in order to fairly assign grades.

The fourth factor is interaction / feedback. This adds an important human element to an ER programme. Interaction between the teacher and students can focus on the amount read, what books are being chosen and how a student is feeling about the programme in general. Such interaction /feedback helps maintain student motivation and can provide a skilled teacher with opportunities for indirectly judging a student's reading comprehension level.

### **Our ER Programme: A case study**

#### **Resources**

A variety of graded readers were bought and placed in plastic boxes on a trolley. Each box was labeled with a *yomiyasusa* level (YL). The SEG school in Tokyo developed the YL measure of reading difficulty. For more information on YL see Tase(2011). Using YL it is possible to group graded readers from different publishers into similar reading levels starting at YL 0.1 and increasing in increments of 0.1. In the first semester the Oxford Reading Tree (ORT) series Level 1 to 8 were used. The decision to limited student choice in the first semester was a pedagogical one to ensure students initial reading level was suitably easy.

#### **Method**

The book trolley was wheeled to the classroom to allow students easy access to the books. When not being used in class the trolley was parked in the English department library allowing free access to students at anytime. The borrowing

system worked on trust. Students were encouraged to keep books for only one night if they took them home to avoid a shortage of books during class time.

In the first class the teacher explained the system and set the minimum number of words students must read in order to get credit for the class. The first semester target was set at a minimum of 50,000 words. The second semester target was set at a minimum of 75,000 words. If a student read the minimum they would receive a grade of 60%. If a student read more than the minimum number of words they received a higher grade. In the first semester grades were calculated simply as  $[\text{number of words read}/1000]$ . In the second semester the calculation was  $[\text{Number of words}/5000 \times 4]$ . Hence, in order to achieve the same grade in semester 2 as achieved in semester 1 a student needs to read more.

In class a *Maximum Time-on-Task* principle was employed. This means that the students used the class time for actively reading. If you had ever walked into this class you would have seen students silently reading, recording the title, number of words and YL level of each book in their record book<sup>6</sup>, walking to the trolley to change their books or individually reading aloud to the teacher.

Reading aloud individually to the teacher incorporated the important factor of interaction / feedback into the programme. Before listening to the student the teacher recorded the up-to-date total word count for that student. Sitting next to the teacher, individually reading aloud for a few minutes the teacher was able to check a student's understanding, add cultural insights and manifest a real interest in each individual student. On average the teacher could hear each student read once every two weeks. Any student who did not read aloud in a particular week gave their running word count total to the teacher at the end of the class. The teacher recorded all scores directly into an Excel worksheet.

---

6 Available to order from SEG online book shop. [www.seg.co.jp/](http://www.seg.co.jp/)

The class was designed so students spent the maximum amount of time actually reading and consequently forming the habit of reading. No time was spent lecturing, translating a text or studying the text using dictionaries. All the time was spent on reading.

### **Results**

The results are based on a questionnaire given to all students (n=22) at the end of the first semester. In the first semester (15 weeks) the students read on average 88,909 words in 160 books. The least amount read was 50425 words and the most read was 453960 words. The average read excluding the highest students score (as this was exceptional) was 70657 words in 141 books. 90% of the students stated they had read more in this class than any previous English class. 95% of all students believed they had improved their reading ability.

The experience of reading aloud to the teacher was wholly positive. No student disliked doing this with 95% rating it as strongly positive.

Asked to compare this class to their 1<sup>st</sup> year reading class the following comments were made:

1st year Reading class was...	2nd year Reading class is...
...was very different from this class (7)	...I <u>have to</u> read by myself, so it improves my reading skill
...just translating to Japanese	...very fun because I read by myself and can improve my language skill
...comprehension quizzes of a text	...I can feel my reading skill is improving (2)
...grammar based --- it was really boring	...very interesting to learn this way (3)
...shadowing	...very fun
...more difficult (3)	
...same as now	
...use English newspaper	
...just listening	
...did quizzes of a text rather than 'read' deeply	

[( n ) = number of students who made the same comment.]

When asked about the books the students made the following comments:

*"I can read from easy one"*, *"easy to understand/read (5)"*, *"fun (5)"*, *"interesting stories" (6)*, *"enjoyable to read (3)"*, *"picture is cute (2)"*, *"ORT 4-6 is good, but 9 I need dictionary"*, *"short story doesn't make me bored"*, *"excellent for me"*.

In general, for this level of class the students could all find books they could read. On average students were comfortable reading ORT level 6 or 7 without a dictionary.

100% of students thought it was important to improve their reading skill. 77% thought that all 1<sup>st</sup> year and all 2<sup>nd</sup> year classes should do extensive reading.

The reasons stated were as follows;

*... to improve basic skill of English*

*... I can read at my own pace*

... if I can't read and write I'll be in trouble when I go to upper grade and when I leave university.

... what I did last year was too difficult to read, besides because of the class style that a student [in year 1] was asked to translate by a teacher, I only read my part. Plus, the class had so many grammar things I didn't feel I was 'reading' at all. However I can feel I'm 'reading' in this class now, so I can read actively by myself.

... the amount of expressions and words I can learn increases

... less opportunity to read books in English if I don't have this class (2)

... it improves my English (2)

... it's funny and it's important

... I can re-start learning grammar

... easy to learn words and phrases (2)

... because it's 'reading' class

... I became to read English book naturally and learnt a lot of vocabulary

... now, I want to read higher level books

The time students spent reading outside of class was as follows;

less than 15 mins	15-30 mins	31-60 mins	61-90 mins	91-120 mins	121-150 mins	more than 150 mins
4	6	6	3	0	0	1

All students, when asked to decide their own target for the second semester, chose a target higher than the number of words they had read in semester 1.

## Teacher observations

The students always took responsibility for their reading. Two students brought

the reading trolley to class and students started to read even before the teacher arrived. All students recorded what they had read conscientiously in their record books. If a record book was forgotten it was always accurately updated, and some students also noted new words and made comments about the books they had read. All students who attended the class read at least 50,000 words and so received credit for the course. Students read quietly and were able to concentrate on reading for the full class period. There was always a quiet, hard-working, but pleasant atmosphere in the classroom. Each student read on average eight times to the teacher in the first semester. On occasions the teacher had to advise a student to choose an easier level book as they were obviously not understanding enough of what they were reading. However, generally students were able to select appropriate level books, a teacher observation supported by the high satisfaction level with materials reported on the questionnaire.

## **Discussion**

From the questionnaire results and teacher feedback it can be ascertained that the general atmosphere in the class and the attitude towards doing extensive reading was overwhelmingly positive. This was the first time for 81% of these students to take part in an ER programme with many of the students having had less than positive experiences in “reading” classes in their first year. Surprisingly, only 22% of students in this class said that they read two or more times a week in their native language i.e. Japanese. This figure needs checking, but it is I think fair to say these students are not prolific readers and are not in the habit of reading. Hence, although some proponents of ER<sup>7</sup> suggest it should be done outside of class, in order to create the habit of actually reading English fluently and for

---

7 See Waring & Takahashi(2000).

enjoyment placing the ER programme within the class, at least initially, was the best way to instill the reading habit in these students, I believe.

The record-keeping books gave a clear focus to the classes and play an important role in maintaining the motivation to read. The target amount of reading for this class seemed to be realistic and achievable. If these students had started ER in the 1<sup>st</sup> year the targets could realistically have been increased to at least 300,000 in one year. The targets for higher level classes next year can be set higher than this class. In addition, the amount of time spent reading outside of class should be increased.

Before starting this course I had wondered if reading books designed for native-speaker children would have the necessary appeal to university students. No student said they were unhappy with the material. In the second semester more books were added which helped maintain a good stock of interesting material to read. Next year when the programme will be used with all 2<sup>nd</sup> year students it will be necessary to provide a wider range of books to accommodate the wider range of student abilities.

The only area of slight concern is comprehension. I strongly believe students at university age should become autonomous learners where they decide the appropriate level of the books they are reading. Listening to each student once every two weeks allowed me to judge roughly their understanding and when necessary advise them to choose easier reading material.

Introducing book reports, interviews or presentations would place more emphasis on comprehension. However, the negative effect of reducing the time that students spend actually reading could outweigh the positive effect regarding comprehension. Even if the time spent is outside class, it is still time that could be used for reading. In addition, any form of comprehension check which is not

actual reading itself, is a form of test. Extensive reading aims to instill in our students an enjoyment for reading books in English and to create within them the habit of so doing. Testing is highly likely to be counter-productive to this aim.

From April 2013 all 2<sup>nd</sup> year students will have one semester of ER as part of their compulsory reading course in the English department. Increasing the number and widening the ability range of students in the programme next year will provide broader data on how effective extensive reading is at increasing comprehensible input and by so doing improving the overall language learning programme offered by the department. Such results will be made available in this publication next year.

References:

- Day, R., & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Oxford: OUP.
- Day, R., & Bamford, J. (2002). Top ten principles for teaching extensive reading. *Reading in a Foreign Language, 14*(2). Retrieved October 20, 2012, from <http://nflrc.hawaii.edu/rfl/October2002/day/day.html>
- Furukawa, A., & Kawate, M. (2003). 『今日から読みます英語 100 万語』. Tokyo: Nippon Jitsugyo Publishing.
- Hill, D. (2001). Graded readers. *ELT Journal, 55*(3), 300-324.
- Krashen, S., & Terrell, T. (1983). *The natural approach*. Oxford: Pergamon Press.
- Nation, I.S.P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*. Massachusetts: Heinle & Heinle.
- Nation, P. (1997). The language learning benefits of extensive reading. *The Language Teacher, 21*(5), 13-16.

- Paradis, M. (2009). *Declarative and procedural determinants of second languages*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Prowse, P. (2003). Extensive reading. *English Teaching Professional*, 27, 40-45.
- Robb, T. (1998). Extensive reading for Japanese English majors. Retrieved October 12, 2012, from <http://www.kyoto-su.ac.jp/~trobb/exten.html>
- Tase, M. (2011). Extensive reading and English language learning: A case study of Japanese children age 12 or under. *English Department Journal*, 39, 67-121.
- Waring, R. (1997). Graded and extensive reading – questions and answers. *The Language Teacher*, 21(5), 9-12.
- Waring, R., & Takahashi, S. (2000). *The 'why' and 'how' of using graded readers*. Oxford: OUP.

## 『ビラヴィド』における白人と黒人の絆 —エイミーとセテ、デンヴァー、ビラヴィド—\*

高橋 晶子

## 1

1970年代、ランダムハウス社で編集者をしていたトニ・モリスン (Toni Morrison, 1931-) は、膨大な写真や図版などで黒人史をたどる『ザ・ブラック・ブック』(*The Black Book*, 1974) を編纂中にある新聞記事を目にする。それは1856年に実際に起きた、逃亡奴隷の母親による子殺し事件を報じるものであった。モリスンはこの事件から想を得て、わが子を殺めた母親の姿を主人公セテ (Sethe) に重ね『ビラヴィド』(*Beloved*, 1987) を執筆した。しかし作品の舞台をセテの子殺し事件から18年後に置いていることや、どこか希望を感じさせる結末などから、モリスンはアフリカ系アメリカ人として事件そのものを作中に再現することや、何より我が子を愛していたセテを凶行に駆り立てた白人達の残忍さや非道さを糾弾することよりむしろ、極限の状況下で子殺しという罪を犯したセテや奴隷としての過去に苦しむ人々の心身の傷がいかに癒され、再生されていくかの過程を描くことに力点を置いていることは明らかである。

セテへの「癒し」、そして「救済」「再生」という点に着目すると、それを誰が行ったかは作品において重要な問題となる。1855年、奴隷主の理不尽な鞭うちによって背中にひどい傷を負いながらも、3人の子供たちと義理の母親が待つオハイオ州シンシナティを目指し、ケンタッキー州の農場からの必死の逃亡を図った身重のセテ。そんな瀕死の彼女を助け、癒す最初の人物は、逃亡の途中、うっそうとした森の中で出会った白人の少女エイミー・デンヴァー (Amy Denver) である。エイミーは白人でありな

\* 本稿は2010年9月25日に仙台白百合女子大学にて開催された日本英文学会東北支部第65回大会にて発表したものに加筆、修正をしたものである。

がら、セテのことを奴隷捕獲人などに密告しないだけでなく、独特の手法でセテの足や背中への傷を手当てし、さらには出産の介助まで行うこととなる。逃亡奴隷であるセテを最初に救うのが、一緒に逃亡を図った農場の仲間達や奴隷達の逃亡を手助けする地下鉄道 (the Underground Railroad) のメンバーではなく、白人の少女であるということには、モリスンの何らかの意図が反映されていると考えて良いのではないだろうか。

しかしながらこれまでエイミーは、本作品においては重要性の低いキャラクターとみなされてきた。それはエイミーを主題にした研究も、タイトルに彼女の名を入れたニコル・M・クーンラッド (Nicole M. Coonrad) の論文以外ほとんど存在しないことから推察できる。エイミーについてのある一部分を取り上げることはあっても、彼女の存在や振る舞いなどを包括的に論じたものはほとんどなく、クーンラッドもまた、エイミーはあまり重要性がない周縁に位置する登場人物としてとらえられ、これまでほとんど議論の対象となつてこなかったと指摘している<sup>1</sup>。

そこで拙論では、エイミーの描かれ方、特に身体描写と振る舞いに着目し、彼女の実態に迫りたい。そして肌の色の違いを超え、エイミーがセテの心身を癒していく手法や過程を具体的に例証することで、『ピラヴィド』における彼女の機能を明らかにし、そこから読み取れるモリスンの意図について考察する。

## 2

アメリカにおける奴隷制という枠組みの中では、白人と黒人の関係は「主と奴隷」という上下の関係で描かれることが常である。しかしモリスンはエイミーとセテの関係においては、そのような描き方はしていない。それどころか彼女は白人であるエイミーと黒人のセテの境遇に、3つの共通点

---

<sup>1</sup> Nicole M. Coonrad, "To Be Loved: Amy Denver and Human Need-Bridges to Understanding in Toni Morrison's *Beloved*," *College Literature* 32. 4 (Fall 2005):184.

を持たせているのである。

1つ目の共通点として彼女達が共に孤児であることがあげられる。エイミーはセテに自分の母親について“My mama worked for these here people to pay for her passage. But then she had me and since she died right after, well, they said I had work for em to pay it off. I did, . . .” (*Beloved*, 33) と語ることから、彼女の母親はヨーロッパからアメリカへ渡ってきた年季奉公人だったと思われる。父親が誰かを知らないエイミーは、母親が残した渡航費用等の借金の返済のため働いているのである。

一方セテの母親は、多くの人々と共に奴隷船に乗せられてアフリカからアメリカへ連れてこられたが、セテがまだ幼い時に、首を吊られて殺害される。そしてエイミー同様、セテもまた父親が誰であるかは知るよしもなく、奴隷としてスウィート・ホーム (*Sweet Home*) と呼ばれる農場で働いている。つまり彼女達は、孤児であるだけでなく、父親の不在とかすかな記憶の中の母親の存在という点も共通している。

2つ目の共通点として、セテ同様エイミーもまた隷属状態にあったということがあげられる。エイミーの姿は、ボロボロのみすぼらしい身なりをした浮浪者として描かれる。また彼女はセテに、雇い主であるバディ (*Mr. Buddy*) からどのような扱いを受けていたかについて“I used to be a good size. Nice arms and everything. Wouldn't think it, would you? That was before they put me in the root cellar.” (34) と説明する。さらにエイミーは“*Mr. Buddy had a right evil hand too. Whip you for looking at him straight. Sure would. I looked right at him one time and he hauled off and threw the poker at me.*” (79) とバディから受けた虐待についてもセテに語っている。このようにエイミーの語る彼女がおかれていた状況は、ひどく虐待され、さらには白人でありながら奴隷のように扱われていたという事実を示している。特に、まともにバディを見たことで彼の逆鱗に触れた点などは、その最たる例といえるのではないだろうか。

3つ目の共通点として、エイミーはバディのもとから、そしてセテは「先生」(School Teacher) と呼ばれる奴隷主とその息子や甥たちのもとから、それぞれ逃亡を図ったことがあげられる。セテに、逃亡者らしい目つきをしていると思わせるエイミーは、カーマイン色のベルベットを買いにボストンへと向かう途中である。そして彼女はベルベットとは何なのかわからないセテに“velvet is like the world was just born. Clean and new and so smooth. The velvet I seen was brown, but in Boston they got all colors. Carmine. That means red but when you talk about velvet you got to say ‘carmine.’” (33) と教える。このようにエイミーが求めるベルベットについて、クーンラッドは「その豊かな色合いと手触りは、エイミーとセテの人生において欠けている、人間が体験するもののある面を表している」と指摘する<sup>2</sup>。つまりエイミーがベルベットの特徴として語る「清潔さ、新しさ、なめらかさ」というものは、彼女たちのこれまでの奉公人や奴隷としての生活において無縁なものであることを示しているのである。

さらにエイミーが求めているのがカーマイン色、すなわち赤いベルベットであることにも注目すべきであろう。『ピラヴィド』において赤は2つの意味を持つ色となっている。つまりセテが殺害した赤ん坊の流した血の色、すなわち、悲劇的な「死」を象徴する色であると同時に、それとは正反対の「生」を象徴する色として解釈することが可能だからだ。セテの義理の母であり、説教師でもあるベイビー・サグズ (Baby Suggs) は、人々に自分の赤い心臓をいとおしみ、命を尊重することを教える。さらに、奴隷としての体験のせいで心を閉ざし、人生を殺してしまったと語るセテの農場時代の仲間ポール D (Paul D) は、亡霊ピラヴィドと性的関係を持つことで心が動きだし、生きていることを実感する。そのとき彼が無意識に繰り返しつつやく言葉こそ「赤い心臓」(Red heart) という言葉である。このように、誰に所有されることもなく、赤い血が通い、赤い心臓がしっか

---

2 Coonrad, p. 175.

りと鼓動している人間として生きることを象徴する色が赤なのである。エイミーとセテが逃亡を図る目的は、彼女たちが人生において欠けていたものを取り戻し、自分自身の人生を生きるためであり、それはベルベットを強く求め、セテにその素晴らしさを伝えるエイミーの姿に象徴的に示されているのではないだろうか。

ここまでエイミーとセテの境遇の共通点を3つあげたが、オハイオ河に浮かぶ小舟の中でセテが赤ん坊を産んだ直後の“A pateroller passing would have sniggered to see two throw-away people, two lawless outlaws—a slave and a barefoot whitewoman with unpinned hair—wrapping a ten-minute-old baby in the rags they wore.”(84-85) という描写はそれらが意味するものを集約しているように思われる。つまり彼女達にみられる、孤児であり、隷属状態におかれ、脱走を図るという共通点の根底にあるのは、人間らしい生活を送るための法から外れた者であるということである。また別の見方をすれば、このように法から外れたエイミーが、法や社会規範の及ばない、うっそうとした森の中でセテと出会ったということは、白人エイミーが黒人セテと心を通わせることが出来る人物であることの背景にもなっているとも言えよう。

## 3

モリスンは作品の登場人物達の身体を、大きな特徴を持たせて描くことが多い。エイミーの姿もまた、身体そのものにいくつかの特徴を持たせて描かれている。それらがセテとの関係においてどのような意味を持つのかを検討してみたい。

まずエイミーの腕は“like cane stalks”(32)と描写される。奴隷貿易によってアメリカにつれてこられた人々が従事させられた危険で過酷な労働の一つが、プランテーションでのサトウキビ栽培および圧搾機を使った製

糖作業であることから<sup>3</sup>、サトウキビは奴隷制度そして奴隷とされた人々の辛苦を象徴する植物である。さらにエイミーが目指すボストンは、1931年に反奴隷制週刊誌「リベレーター」(The Liberator)を創刊し、「アメリカ奴隷制反対協会」(the American Anti-Slavery Society)の設立者の一人であるウィリアム・ロイド・ギャリソン(William Lloyd Garrison, 1805-79)に代表される奴隷廃止論者が活発に活動していた土地の一つであった。このように腕がサトウキビにたとえられることや、ボストンの歴史的背景を踏まえると、単に自分の欲求のみに従っているように思われるエイミーの姿の別の一面が浮かび上がってくる。つまりエイミーは白人でありながらも黒人奴隷であるセテの苦しみや痛みを理解し、心を寄せることが出来る人物として、さらにセテに自由への希望を与える人物としての役割が与えられていることが予感されるのである。

エイミーの髪もまた彼女の目立つ特徴の一つと言える。彼女の髪は非常に豊かで、強においを放っている。髪は「活力」や「霊力」を象徴するものであり、「生命の躍動」「成功への意思」のイメージを持つとされる<sup>4</sup>。これらの髪のイメージは、心身の自由を獲得し、自分自身の生を謳歌するためにバディのもとから逃亡を図ったエイミーによく当てはまる。また瀕死のセテを見て、エイミーは“‘Sure you can, Lu [Sethe]. Come on,’ said Amy and, with a toss of her hair enough for five heads, she moved toward the path.”(34)と言い、自分が見つけた小屋へとセテを先導して行くのだが、豊かな髪をなびかせながら、絶え間なくおしゃべりをして森の中を進んでいくこの場面からも、エイミーのはつらつとした様子がうかがえる。

のちにセテは娘デンヴァーにエイミーのことを何度も話して聞かせる

---

3 John Hope Franklin, *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans* (New York: Knopf, 1947), pp. 34-36, 46; ジャン・メイエル, 国領苑子訳『奴隷と奴隷商人』(創元社, 1992), pp. 81-89を参照のこと。

4 “hair,” *Dictionary of Symbols and Imagery*, pp. 231-34

が、その中でもエイミーの身体的特徴がいくつか出てくる。それらはセテにとって非常に印象深く、大きな意味を持つ特徴と言える。その一つがエイミーの手である。セテはデンヴァーに“she has good hands”(76)と教える。エイミーの手はセテの傷の手当し、新しい命を導くなど、生のイメージに満ちている。これはエイミーが、彼女を虐待するバディについて“Mr. Buddy had a right evil hand”(79)と言うのと対照的である。バディの手には、奴隷達をひどく鞭で打ち、人間ではなく動物としてのセテの特徴をノートに書き留めるスウィート・ホーム農場の奴隷主や彼の甥たちと共通する邪悪さがあり、常に死のイメージが付きまどっているからである。

さらにセテを勇気づけたのはエイミーの口元である。そのことについて母親のセテから聞いたデンヴァーは、姉である亡霊ビラヴィドに次のように伝える。

But the [Amy's ] mouth was what kept her[Sethe] from being scared. She[Sethe] said there ain't nothing to go by with white people. You don't know they'll jump. Say one thing, do another. But if you looked at the mouth sometimes you could tell by that. She[Sethe] said this girl talked a storm, but there wasn't no meanness around her mouth.” (77)

セテのみならず神にまでのしりの言葉を吐くエイミーだが、その口元からセテはこれまで白人に対して感じたことのなかった優しさを感じている。そして自分と胎内の赤ん坊のために、母から聞いたという歌を歌ってくれるエイミーを信頼するようになる。

エイミーの粗野な言動の裏にあるもの。それは彼女が持つ生来の善良な人間性である。そしてエイミーの身体は、セテの心身の痛みを理解し、癒す人物であることを表象するのである。

4

セテの傷を手当てし、彼女の出産の介助を行うエイミーだが、その手法は独特である。足の甲の形が分からなくなるほど腫れあがり、すでに足首の感覚は無くなったセテの足を “Then she[Amy] did the magic: lifted Sethe’s feet and legs and massaged them until she cried salt tears. ‘It’s gonna hurt, now,’ said Amy. ‘Anything dead coming back to life hurts.’” (35) とあるように、あえて痛み感覚を取り戻すような方法で手当てするのである。さらにマッサージの痛みにも必死に耐えるセテに、エイミーは “ ‘More it hurt more better it is. Can’t nothing heal without pain, you know.’ ” (80) と教える。この言葉は単に身体の痛みだけでなく、心の痛みと、それを乗り越えて得られるカタルシスや救済について指していると考えられるのではないか。またセテの胎内で死んだと思われた赤ん坊の出産の場面では、難産のために気を失いそうなほど苦しむセテから、エイミーは赤ん坊を引っ張り出す。死にかけていた赤ん坊を、あの強くて良い手を使ってエイミーはこの世へと引き戻すのであり、それは彼女の言葉通りまるで死んだ赤ん坊が生き返ったかのようなのである。

セテの背中への傷を手当てするエイミーは、藤平育子がいみじくも指摘しているように、「セテの背中の読みを言葉で伝える唯一の人物」となる<sup>5</sup>。奴隷主の鞭打ちで受けたセテの背中の傷のあまりの惨さにエイミーは絶句するが、次の瞬間あの良い手の指でその傷跡にそっと触れて、腫れあがった皮膚や流れる血、膿を “It’s a tree, Lu[Sethe]. A chokecherry tree.” (79) とセテに教え、さらには花盛りの幹や枝、実にたとえる。このエイミーの読みからは、聖書に登場する豊穡や再生の象徴である「命の木」の隠喩を読み取ることが可能ではないだろうか。凄惨な傷跡は死につながっていたが、

---

5 藤平育子『カーニバル色のパッチワーク・キルトートニ・モリスンの文学』（学藝書林、1996）、p. 191.

それを生命力に満ちあふれた木に変えることで、そこにセテの母性や愛情の豊かさが表され、同時に「痛みをとまなう再生」というエイミーの信じる救済と癒しの真理が反映されるのである。

“Amy returned with two palmfuls of web, which she cleaned of prey and then draped on Sethe’s back, saying it was like stringing a tree for Christmas.” (80) とあるように、エイミーはクモの巣を使って、その独特な傷の手当てを続ける。奴隷制度の残忍さと忌わしさを象徴するセテの背中の傷跡を、キリストの降誕という聖なるものへつなげるエイミーの想像力と言葉。それは豊かな髪に象徴される、彼女が持つ「活力」や「霊力」といったものに裏打ちされたものであり、それらの力は彼女のあの優しい口からセテへと伝えられることで、奴隷とされることの痛みや屈辱を乗り越える力にもなっていくこととなる。

ここまでみてきたエイミーの癒しの手法には、二面性があることが明らかである。一つは聖なる一面である。エイミーは先にあげたように、セテの傷をチョークチェリーと名付けることでその存在を言葉で伝えた唯一の人物であることから、ある種の神格化がなされていると考えられる。また、あの良い手で忌わしい傷を手当てし、クリスマスツリーで新しい命の誕生を祝うことは、彼女の聖なる性質の表れではないか。その一方で“she[Amy] did the magic” (35) という表現にあるとおり、彼女の手当てには呪術的な一面もある。ウィルフレッド・D・サミュエルズとクレノラ・ハドソン・ウィームズ (Wilfred D. Samuels and Clenora Hudson-Weems) は、傷口にクモの巣をかけて治療するエイミーを呪医 (curandera) だと指摘する<sup>6</sup>。さらにエイミーがうっそうとした森の茂み中で傷の手当てをし、出産の介助を

6 Samuels と Hudson-Weems は、エイミーは『ソロモンの歌』(Song of Solomon, 1977) のパイロット (Pilot) のように人を蘇らせることが出来る「癒す人物」であり、同時に呪医 (curandera) だと指摘する。Wilfred D. Samuels and Clenora Hudson-Weems, *Toni Morrison* (Boston: Twayne, 1990), p. 115 を参照のこと。

行うことなどから、彼女は生と死の両方にかかわる活動を行うという魔女のような存在でもある。聖なる力と呪術的な力を併せ持つことにより、エイミーのキャラクター造形は一層豊かなものとなっている。そしてこのような二面性を持つエイミーの癒しは、これまで、奪われ、傷つけられ、支配されてきたパッシヴな存在としてのセテを、女性ならではの豊穰性を持ったアクティヴな存在へと変えていくのである。

5

出産という大仕事をやり遂げたことで、エイミーとセテの間にはより一層強い心の結びつきが生まれる。しかしモリスンは二人の絆に、最終的にはケンタッキー州という土地と 1855 年という時代を反映させている。セテはエイミーに対し最後までルウと偽名を使い、一方エイミーも、自身が逃亡の身であり、逃亡奴隷であるセテ親子と一緒にいることは危険だと考えて、すぐにボストンへと出発する。白人と黒人を隔てるものをあえて残すことで、ともすれば理想的なファンタジーのようになってしまう二人の関係に、一定のリアリティが留保されることとなる。

セテと彼女の赤ん坊の無事を確認し、エイミーは作品の舞台からは退場するが、彼女のエイミー・デンヴァーという名前はセテの二人の娘たちに継承されていく。エイミーの介助を受けてセテが生んだ赤ん坊は、彼女にちなんでデンヴァーと名付けられる。またエイミーという名はフランス語の *aimee* に由来する。この語は英語では「最愛の」を意味する *beloved* であり、セテによって殺害され、亡霊となって現れたデンヴァーの姉ピラヴィドの名と同じである。

さらにセテの娘たちは、エイミーから名前だけでなく、セテを救済するという役割も継承していく。亡霊となった娘ピラヴィドの出現によって、セテは奴隷としての過去と子殺しという罪に苦しみながらも向き合うこととなるが、それは結果的にポール D とともに生きていく希望を見出すこ

ともつながる。このことは、「死んだものが生き返るときは、どんなものだって痛むもの」というエイミーの救済と癒しの真理に合致するものである。

エイミーの介助によってこの世に生を受けたデンヴァーは、再生には常に痛みを伴うというエイミーの考えを“A truth for all times” (35) と認め、姉ビラヴィドよりしっかりと、その役割を引き継いでいくことになる。セテはエイミーとの思い出を、時に絵を描きながらデンヴァーに何度も詳しく話して聞かせる。このセテの物語の中でも、デンヴァーは自分が生まれた時のくだりに、次のような特別な感情を抱く。

This was the part of the story she loved. She was coming to it now, and she loved it because it was all about herself; but she hated it too because it made her feel like a bill was owing somewhere and she, Denver, had to pay it. But who she owed or what to pay it with eluded her. (77)

このようなデンヴァーの心情は、殺人を犯した母に抱く怒りや恐れと、娘としての母への愛情の間で揺れ動くジレンマの表れであると同時に、エイミーから引き継いだセテの救済という役割について、この時点ではまだ自覚と覚悟が乏しいことを示している。しかし亡霊ビラヴィドによって支配され、心身ともに弱っていくセテの姿を目の当たりにし、ついにデンヴァーはエイミーから継承した役割に覚醒することとなる。セテをビラヴィドの呪縛から解放し、救済するために、デンヴァーは家を飛び出し、長い間断絶していたコミュニティとの関係を復活させる。デンヴァーがずっとわからなかった支払いをする相手、それは母と自分の命を救ってくれたエイミーであり、彼女の役割を引き継ぐことでデンヴァーの抱いたジレンマは解消されたに違いない。そしてその瞬間、長い間うまく築けなかった母との関係や孤独に苦しんだエイミーもまた救済、再生されたのである。

6

白人エイミーと逃亡奴隷セテの間に存在する絆。それを互いに実際に言葉で確認しあうことはない。しかしこれまでみてきたように、エイミーがセテを理解し癒す人物であることは、2人の境遇の共通性だけでなくエイミーの身体描写にも象徴的に表され、それが2人の絆の強さを示すことにもなっている。またエイミーとセテの2人の娘の間にも強い絆が存在する。特に陣痛に苦しむセテと同じくらい必死の思いで彼女の介助したエイミーと、その時に誕生したデンヴァーとの関係は、親子関係に似たものと解釈できる。だからこそこの出産は“they[Sethe and Amy] did it appropriately and well” (85) と表現されているのである。白人エイミーから黒人デンヴァーに癒す者としての役割が引き継がれるだけでなく、親子のような絆がつかまっていくこと。これはモリスンの作家としての挑戦と言えるのではないか。

セテと別れたエイミーだが、その存在は常にセテのそばにある。デンヴァーは、セテが祈りをささげている時、一着の白いドレスと一緒に跪いて、袖をセテの腰にまわしているのを目撃する。

“The dress and her [Denver] mother together looked like two friendly grown-up women—one (the dress) helping out the other. And the magic of her birth, its miracle in fact, testified to that friendliness as did her own name.” (29)

上記の引用に出てくる白いドレスは、明らかにエイミーのことを指しており、彼女はセテと別れた後もずっとセテを支え続けていることが示されている。このエイミーの支えこそ、セテが彼女との出会いを通して初めて知った白人との友情と、女の絆の証である。セテはエイミーと別れた後、

さらに過酷な運命と直面し、傷つき、さらには罪まで犯してしまう。しかしエイミーの精神がセテの娘達へ、さらにはコミュニティの女達へと引き継がれていくことで、また新たな女の絆が生まれ、最終的にはセテに真の救済と再生がもたらされる。

エイミーの身体描写と振る舞いからみえてくるもの。それはモリスンが「女の絆」に対して抱く信念とも言うべきものではないか。すなわち、彼女にとって女の絆とは、社会規範や法といったものを超えるしなやかさを持ち、有機的に繋がっていくものなのである。

#### 引用文献

- Coonradt, Nicole M. "To Be Loved: Amy Denver and Human Need-Bridges to Understanding in Toni Morrison's *Beloved*." *College Literature* 32.4 (Fall 2005): 168-87.
- Franklin, John Hope. *From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans*. New York: Knopf, 1947.
- Morrison, Toni. *Beloved*. 1987. London: Vintage, 1997.
- Samuels, Wilfred D. and Clenora Hudson-Weems. *Toni Morrison*. Boston: Twayne, 1990.
- Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam: North-Holland, 1974.
- ジャン・メイエル, 国領苑子訳『奴隷と奴隷商人』(創元社, 1992)
- 藤平育子『カーニバル色のパッチワークキルトートニ・モリスンの文学』(學藝書林, 1996)

## 珈琲とアメリカ文学——気まぐれな散歩 (26)

## 『ザ・ヒッピー』を読む

本田 康典

昨年早々に著名な翻訳家である飯田隆昭氏から『ザ・ヒッピー』（パートン・H・ウルフ著、国書刊行会 2012年1月刊行）が送られてきた。サブタイトルが「フラワー・チルドレンの反抗と挫折」となっている。すぐに一読した。いちばん面白かった箇所は、「訳者あとがき」にみえる以下の一節であった。「ある日、わが家の飼い猫の一匹が古本の詰まったダンボール箱の上に小便と糞をもらしました。気色悪いので紙類収集の日にこれをそっくり捨てようと思いましたが、いちおう中身を確認してからと考えかき出してみると、なんとペーパーバックの『ザ・ヒッピー』が出てきたのです。化学変化を起こしたのか全ページが一様に紅茶色に変色していましたが、表紙写真の、赤ん坊を抱いて乳を飲ませている豊かな肢体の全裸の女性に魅せられ、未読のこの洋書を一気に読み終えました」。“翻訳依存症”に罹っていた訳者は「名状しがたい共感と懐かしさに襲われ」、5ヶ月間で訳出したという。

退職後に蔵書を整理していると、いつか読むつもりでいた書物に出くわして、ある種の感懐に襲われるというのは、まああることだと思う。『ザ・ヒッピー』の原書が1968年に出版されているから、おそらく飯田氏は入手してから40年以上が経過してから通読したのではあるまいか。ぼくにも入手後40年くらい経過してから、捨てたり読んだりした本がある。

訳書の帯に「激動の1960年代に反体制・反権力を掲げて世界を席卷したヒッピー・ムーブメントの実像に迫る！」という宣伝文句が刷られている。「キューバ危機、ケネディ暗殺、ベトナム戦争、学園紛争」などの文字も躍っている。アメリカ史について言えば、細かいことは記憶せず、10

年単位で特徴を把握するのがよい。1930年代は大恐慌の時代、40年代は第二次世界大戦の終結と復興というふうの流れをつかむとわかりやすくなる。ぼくが大学に入学した1957年は、ビート・ジェネレーションの全盛時代であった。

大学生のときに新宿の紀伊國屋でジャック・ケルアックの長編『路上にて』のペーパーバックを買った。背表紙に刷られていた「ビート世代のバイブル」という宣伝文句に引っかかったのだ。そういう次第でビート世代の作家や詩人の名前くらいは脳裏に刻み込まれた。やがてヒッピーの時代に移行していったが、ヒッピーというのはわかりにくかった。ビート世代の動きは文学運動であったから、作品を通じてなんとなく理解できたが、ヒッピーには著名な作家がいなかった。こちらは当時のアメリカの社会現象、文化運動であった。『ザ・ヒッピー』のあちこちにビート世代の作家や詩人が登場している。たとえ違いがわからなくても、読者はビート世代とヒッピーを区別しながら読むべきだろう。と、ぼくが述べるのは、1986年にアメリカの西海岸でみたドキュメンタリー映画『ケルアックに何が あったのか?』(What Happened to Kerouac?)を思い出したからだ。この映画にはケルアックへのインタビューが二回出てくる。最初のインタビューのケルアックは初々しく、はにかみやであった。二回目のときは、ウイスキーの飲みすぎのせいか、一世を風靡した作家はすっかりむくんでしまい、痛々しかった。司会者(名前は失念した)がうっかりケルアックをヒッピーとみなすと、即座にケルアックは断固として異議をとなえた。彼は1968年に、つまり『ザ・ヒッピー』の原書が出版された年に逝った。

『ザ・ヒッピー』の「ヒッピーはどこから来たのか」と題する章では、ビート世代は「ビートニク」となっていて、往時の新聞記事のヘッドラインなどでも「ビートニク」と呼ばれていたことが判る。この名称について思い当たることがある。ぼくが大学に入学した1957年にソヴィエト連邦が「スプートニク」(Sputnik)という無人の人工衛星を打ち上げた。4年後の人

工衛星には人類最初の宇宙飛行士ガガーリンが搭乗した。彼はロシアの英雄として記憶されている。この衝撃的なニュースのおかげで、宇宙が米ソの競争の舞台になってしまった。「ビートニク」はロシア語の語根をもち、1957年以降に使われた単語であろう。つまり、『ザ・ヒッピー』は、1950年代末から60年代にかけての、サンフランシスコとその周辺におけるヒッピーと称される新しいタイプのアメリカ人の衝撃的な登場を描いた作品である。

『ザ・ヒッピー』に描かれたヒッピー現象についていえば、後世の研究者が資料を駆使して冷静に分析したものではなく、ヒッピー現象のさなかにあって書き上げられたことに特徴がある。つまり、本書には当時の熱気が溢れていて、そうした熱気にあおられて、飯田氏が一気に呵成に訳出したのではあるまいか、とぼくは想像する。

本書を読んでいくと、あちらこちらに「コーヒーハウス」という単語が出てくる。「珈琲とアメリカ文学——気まぐれな散歩」という題目で雑文を書き散らかしてきたぼくが注目するのは、当然ながら、こういう箇所だ。ずっと以前に、アメリカにはコーヒーショップ（実体は簡易食堂）があってもコーヒーハウスはないと書いたような気がするが、訂正するのにもってこの機会である。17世紀、18世紀のロンドンではコーヒーハウスが流行し、政治家や文学者のたまり場であった。議論や社交の場であったようだ。植民地時代のボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアにはコーヒーハウスが存在したが、根付かなかったと言うべきだと思う。

18世紀アメリカの作家チャールズ・ブロックデン・ブラウンの小説『ウイランド』だったか『アーサー・マーヴィン』のなかで、登場人物がフィラデルフィアのコーヒーハウスに入っていく場面がある。「コーヒーハウスに行く」というのを「おしゃべりをする」と説明しているのがアメリカの『ランダム・ハウス英語辞典』ではなかったかしら。

さて、『ザ・ヒッピー』から「コーヒーハウス」という単語が含まれている文章を二、三だけ拾ってみよう。

新聞にはビートニクの異様で珍妙な行為が溢れ返っていた。マリファナパーティー、乱交、たばこの煙で息が詰まりそうな、狭い混雑したコーヒーハウスで行われる、音楽をともなった詩朗読の秘儀的なセッション。

1960年、ボブ・スタップスという名の髭を生やした若い実業家が、ヘイト・アシュベリーに住む五、六十人の髭づらのポヘミアンのためコーヒーハウスをオープンすることに決めた。そこでヘイズ通りの店“ブルーユニコーン”が、ビートとオフビート（ビートでない者）のための最初のノースビーチ風の溜まり場となった。〈中略〉そこはコーヒーハウスであるばかりでなく、放浪するドロップアウトの郵便物の送り先であり、行方不明中のビートの友人に関する情報源であり、貧しい作家のために鉛筆や紙類を提供する店であり、皿洗いを喜んでやれば——それが嫌であっても——ただで食べ物にありつける場所となった。

ノースビーチにビートニクが跋扈<sup>ぼっこ</sup>していた時期の音楽は、穏やかなギター伴奏とともに歌われるジャズやフォークだった。コーヒーハウスで詩の朗読を聴いたり、ワインやビールを飲みながら、また誰かのパッドでのんびり横になってマリファナのパイプをくゆらせて楽しむのが音楽であった。

あと何ヶ月かで1966年も終わろうとする頃、ヘイト通りがどうなるのかは誰も関心を持たなかった。ヘイト通りはこの前まで空き

店舗をかかえ、寂れて消えようとする商業地域であったが、突然にわか景気で沸き立つ、いわば旧西部の町に生まれ変わった。酒場の代わりにコーヒーハウスができた。

『ザ・ヒッピー』にコーヒーハウスの店名がいろいろと出てくるので、カフェ・トリエステという店が出てこないかと思いながら通読した。1980年代中ごろにシテイライツという書店に立ち寄ったことがある。ビート世代の文学者たちのたまり場だったからだ。予想していたように、ビートの作家や詩人の作品がずらりと書架に収まっていた。店内には立ち読み客のために椅子が置かれていた。当時の日本の書舗ではそうしたサービスがなかったので新鮮な感じがした。数冊の本とパンフレットを買い込み、近くの目立たないカフェ・トリエステで苦いコーヒーをすすった。のちにシテイライツに宛ててぼくは問い合わせの手紙を書いた。書店で入手した小冊子には出版社の記載がないので、作成者の住所を知らせてもらえまいかという内容であった。すぐに返信の葉書を落手した。意外にも小冊子を仕入れた書店は、それを持ち込んだ詩人の住所を知らなかった。「ビッグ・サーに住むエミール・ホワイトなら知っているかもしれません」という反応が記憶に突き刺さっている。ぼくは1982年夏にエミール・ホワイトに会ったことがある。ユニークな人物だったので、ぼくは雑誌『英語青年』（1983年7月号）に彼についてのエッセイを寄稿した。ていねいな返信を書き送ってくれたのは、ビートの詩人ローレンス・ファーリングティだった。彼はシテイライツの経営者としても知られていた。『ザ・ヒッピー』にはシテイライツやファーリングティについての言及が見られるが、カフェ・トリエステが出てこない。

カフェ・トリエステでは初老の男性がコミックを描いていた。ぼくが入手した本に目を向けると、「昔、アレン・ギンズバーグがこの店でポエトリー・リーディングをしたんだよ」と教えてくれた。実はシテイライツで

買い求めた本の書名についての記憶が曖昧だ。おそらく 1955 年にシテイライツから出版されたギンズバーグの詩集『吠える』を書店訪問の記念として買い求めたのだろう。かさばらないし、「序文」を書いた W・カーロス・ウィリアムズの「ご婦人たちよ、スカートの裾をからげなさい。わたしたちは地獄の底を通るのです」という文章が好きだったから。

『ザ・ヒッピー』を読んで学んだことのひとつは、60 年代のサンフランシスコではコーヒーハウスがどんどん誕生し、詩の朗読がさかんに試みられていたことだ。

『ザ・ヒッピー』を一読して得られた最大の収穫は別にあった。ぼくの記憶の底に沈んでいたヒッピーを 40 余年ぶりに思い起こしたからである。

1970 年、ぼくは青森県の弘前学院短大（翌年、四年制大学に改組）に勤務していた。春先にビート髭を生やしたデーヴィッド・ハンド（David Hand）が姿を現した。ハーヴァード大学の博士課程の学生で、アメリカ文学を専攻していた。当時のキリスト教主義の短大・大学の英文科はどこでもアメリカ人の教育宣教師が「英会話」を担当していた。彼は教育宣教師が担当するはずの「英会話」を週 2 コマだけ教えることになった。

当時のジョンソン大統領はベトナム戦争を継続していた。アメリカの若者たちがベトナムで戦死したが、戦争の大義があやふやであり、反戦運動が盛り上がっていた。ヒッピーも戦争に反対であったが、アメリカには徴兵制度があり、国民の義務として戦場に狩り出される者もいた。しかし、戦争は絶対に反対という思想や意思を政府としても押しつづすことができず、ケネディ大統領は「平和部隊」（the Peace Corps）を創設した。この政策は、アメリカの青年が開発途上国で戦争の代わりに井戸を掘ったり、英語を教えたりして貢献すれば、国民の義務を果たしたと認定する制度であった。当時の日本は、まだ先進国ではなかったように思うが、開発途上国でもなかったと思う。弘前でアメリカ政府を糾弾するような発言を繰り返

返していたデーヴィッド・ハンドを想起すると、彼はアメリカでゴネまくって日本を開発途上国にしてしまったのではないかとぼくは空想する。とにかく、彼は「平和部隊」の一員として日本に一年間も滞在したのである。教育宣教師たちはそっと彼を見守っているような感じだったし、ある学会で仙台の大学の、アメリカ文学担当のアメリカ人教授から「デーヴィッド・ハンドは元気でやっていますか？」と心配そうに質問されて意外に思ったこともある。

ある日、デーヴィッド・ハンドがぼくの研究室に来て、読書会を開きたいので協力してほしいと申し入れてきた。反対する理由はなかった。どんな作品を採り上げるのかと訊ねたら、フォークナーの中篇小説『熊』を最初に読むという。短大生には難しい作品だったので、高校の英語の先生たちに声をかけて読書会を成立させた。メンバーのなかには宮城学院女子大を卒業した教員もいた。次の作品はマーク・トウエインの『ハックルベリー・フィンの冒険』であった。三番目の（そして最後の）作品が19世紀中葉の思想家ヘンリー・デイヴィッド・ソローの『ウォルデン、森の生活』であった。マサチューセッツ州コンコードのはずれにウォルデンという湖のような大きな池があり、周囲は森に囲まれている。ソローは独力で池のほとりに小屋を建て、2年余り独りで暮らした。晴耕雨読の生活。畑を耕したり、魚を釣って暮らした。2年余の生活を題材にして綴ったのが『ウォルデン、森の生活』であり、アメリカ文学の古典ともくされている。ぼくはウォルデンの池のほとり立ったことがある。人家がなく、ひっそりしていた。ソローによって建てられた小屋は大切に保存されていた。窓から内側を覗いた。土間のある一部屋の小屋。

デーヴィッド・ハンドは、「ソローはアメリカにおける最初のヒッピーだ」と切り出した。その発言だけでぼくは彼の言わんとしていることが推察できた。アメリカは1946年ころメキシコ戦争を開始した。ソローは戦争反対の立場を表明するために税金の不払いという行動に出て、コンコードと

いう村の留置所に一晚投げ込まれた。この折の体験を活かして書かれたのが「市民としての不服従」と題するエッセイである。ベトナム戦争を延々と続行するアメリカ政府に対して、アメリカの市民としてヒッピーは、ソローと同じように不服従の姿勢を示す、とデーヴィッド・ハンドは言おうとしたのだろう。彼の発言を敷衍すれば、ヒッピー現象は突発的で理解困難なものではなく、歴史的文脈のなかで説明できるだろう。

『ウォルデン、森の生活』の読書会で、彼がこれ以外にどんなことをしゃべったのか、ぼくはほとんど記憶していない。「ソローはアメリカにおける最初のヒッピーだ」という科白だけが記憶に突き刺さったままだ。

しかし、あの古典的名著をヒッピーに脈絡させて思考することは可能だろう。あの作品の第一章の章題は「経済」である。この章においてソローはどれだけのお金があれば生きていけるかを語っている。彼はみずから建てた小屋の費用の明細を明らかにしている。板や窓ガラスや釘など。運搬費は背負ったからゼロであると述べている。彼は生きていくために必要な最小の金額を示し、有意義で創造的な生活を送った。彼の生活は当時のアメリカ人に提示した実験であった。

ヒッピーはつましい生活を送った。大企業に就職して高給をもらおうとする輩はヒッピーになる資格はなかっただろう。『ザ・ヒッピー』の「ヒッピーは働きそして遊ぶ」と題する章において、著者は「ヒッピーはできるだけ競争心を持たないようにする」と指摘し、具体的な実例を挙げている。同じ章のなかで、著者は郵便局に勤務するヒッピーについて次のように述べている。「私が郵便局で出会ったヒッピーの大部分は臨時職員であった。彼らは公務員として20年勤めるのかと思うと、怖じ気づいてしまう。たとえマリファナを吸ったり、ワシントンから送られてくる書類にユリの花のスタンプを押ししたりすることが出来たとしてもである。彼らは6ヶ月暮らせる生活費、どこかで勉強したり、新しいキャリアを始めるための費用、短期間メキシコやカナダへ旅行する資金を稼げるまで仕事を続け、退職す

る」。ぼくがこの箇所を引用したのは、ずっと以前に雑誌か何かで郵便局に勤務するヒッピーについて読んだことがあるからだ。10人くらいのヒッピーの集団がいた。彼らは一ヶ月交代で郵便局に夜間に(給料が割り増し)勤務した。つまり、グループ全員が一年に一ヶ月働いた。一人の給料で全員が一ヶ月暮らそうとした。このグループは自分の時間を最大限に確保しようとしたという。

デーヴィッド・ハンドは弘前で一年を過ごして帰国した。やがて黒人女性と暮らしているという葉書を受け取ったが、その後の消息は不明であり、ぼくの記憶から消えそうになっていた。試しに彼の名前をインターネットで検索してみたが、彼についての情報は得られなかった。(2013・1・5)

# 2012 年度 英文学科生の活動



## Microsoft Office Specialist

3年 沢田 千咲

Microsoft Office Specialist とは、皆さんが普段授業のレポートなどで使う Word や Excel などのソフトをしっかりと使いこなせることを証明することができる検定です。私は2年生の時の6月に Word2007 を、その2ヶ月後に Excel2007 を取りました。そのうちのワード部門の方で、この度日本の大学生・短大生部門で17位ということで表彰して頂きました。

元々、パソコン操作が得意ということではなかったのですが、就職するまでに一通りきちんと使えるようになっておいた方がいいのではないかと漠然と思っていたところ、この検定を見つけたので、取得に向けて勉強をしようと決めました。

試験はパソコンを使って行われます。制限時間50分の間に、画面上に表示される20問から35問程度の問題（その時によります）を、次々と解いていくというものです。自分のペースで進んで構わないので、私の場合ですと、20分弱で全て解き終わりました。結果も全問正解でしたので、試験官の方から「MOS 世界学生大会日本大会」にエントリーしませんかとご案内して頂きました。自分では、そこにエントリーするほどの実力があるか疑問だったのですが、すっかりそのことを忘れていた頃に、表彰式の案内が郵送されてきた時は、大変驚きました。

この検定を取得すること自体は、さほど難しいものではありません。初めて使うような機能や少し難しい操作もありますが、中学校や高校、大学1年の情報の授業などで既に身に付いていることも、試験にはたくさん出題されます。しかし、取るからにはきちんと勉強したいと思っていましたので、テキスト1冊を何回も取り組み、完璧に自信をつけて試験に臨んだことが、17位という結果に繋がったのかもしれません。

実際就職活動のためにと取った検定でしたが、今は、学校の授業でレポートを書く際や、何かを集計する際など日常的な場面でも勉強したことが役立っています。それまでは、「ちょっとこの辺がずれているけどまあいいか」ですとか、「なんか見づらいしタイトルや小見出しの字体がいまいちだけどもまあいいか」などと思いながら、レポートを提出していましたが、今ではそれらを解消する方法を身に付けることができたと思います。今後は、この機会に自信をつけたパソコンスキルと地道に努力する力を、就職活動においてアピールしていけるように頑張りたいと思っています。

MOSを取ることは、パソコンが苦手な人も得意な人も、新しい使い方や便利な使い方を身に付け、その力を証明するものとして取得していると自信を持つことができると思います。興味がある方は、挑戦してみてください。そしてその時には、ただ取るだけではなく、ぜひ徹底的に勉強することを心がけてみてください。



## ESL (English Speaking Lounge)

### ESL を利用して

1年 黒石 めぐみ

私は、英会話に対して二つの問題を抱えていました。一つは、ネイティブスピーカーと話すときに相手の目を見られないこと、もう一つは、正しい発音で話すことができないということでした。将来英語を使った職に就きたいと思っていた自分にとって、これらの問題点は、大きな悩みでした。そこで ESL を利用することを決めました。

ESL では、何でも好きなことが話せ、単語の使い方が適当でなければ先生が正しい使い方を教えてくれます。実際に英語圏で使われているスラングや慣用句なども教えてくれます。ESL では、自分の英語が完璧ではないと分かっているので、その代わりに、私は目で必死に訴えようとしています。正しい発音で話さなければ、ネイティブスピーカーには通じません。だから、常に正しい発音を意識するようになります。この時点ですでに、私の問題は消え去りました。

ESL を利用してから約半年経ちますが、この ESL によって私の今までの「英会話のしかた」というものがガラリと変わりました。話すときの表情、ジェスチャー、間の取り方、すべてが日本語会話とは異なります。ESL を利用すると、そのすべてを味わうことができます。だから私は、ESL は私の英会話力を高めてくれる大切なものだ と確信しています。

## 英文学科の魅力の一つ、ESL

2年 田中 里奈

私は、1年生の時からESLを利用しています。このESLについては宮城学院女子大学に入学する前から知っていて、とても興味を持っていました。また、英文学科の大きな魅力の一つだと思います。実際に初めて利用した時は、英語が全く聞き取れず、自分自身も英語で伝えたいことを伝えきれずにショックを受けました。ですが、ネイティブの先生は明るく、私に分かるように話して下さいました。また、英語の正しい発音や適切な言い回しについても教えていただけるので、毎回本当に学ぶことばかりです。その学んだこと一つ一つは、全て大切なことで、これからに生かそうというつもいます。最近の出来事や、思っていることを自由に会話することが出来るので、ESLは自分の英語を試す貴重な場であると思います。2年生になってからは、毎週空きコマに利用しています。今ではネイティブの先生と会話をするのが楽しみで、私にとってESLは大切な時間です。このような貴重な場を利用しないのは、もったいないと思います。是非ESLを活用することをお勧めします。

## ESLを活用して

3年 鎌田 光

ESLを利用し始めて間もなく1年が経ちますが、今思うと現在の英語運用能力は1年前とは別ものになったと感じます。理由は、ここ1年で「自信がついた」からです。

たとえ英文学科に所属していても、1日あたりに使用する言語のうち英

語はその10%も占めません。日本で生活している限り、自らの周囲を取り巻くものはすべて日本語です。私はこの状況から何とかして脱却しなければと思い、3年生から頻繁にESLを活用するようになりました。

初めは、上手く自分の感情や意見を英語にできないことにフラストレーションを感じましたが、続けていくうちに、自然と「ことばの引き出し」を増やす事が出来たように思います。重要なのは、「続ける」ということです。

現在は、日本語を全く話せない英語母語話者の方とも臆せず話す事が出来ます。大切なのは、「正しい英語を話すこと」ではなく、「伝える意思を持つこと」であると考えます。

## 英語を話すことに慣れる

4年 砥石 梨永

私は特にスピーキングに苦手意識を持っており、その苦手を克服しようと思い、このESLを利用していました。ESLの先生方は、優しくてユーモアに溢れているので、その時間をとても楽しむことができました。そして、話しやすい雰囲気をつくってくださるので、間違いを恐れることなく英語を話すことができました。会話をしていく中で、異文化を学ぶことができたり、適切な言い回しを教えてもらうことができ、非常に役に立ちました。英語を話すことに慣れ、スピーキングの力を上げるには、とてもいい機会だと思います。みなさんもぜひESLを活用してみてください。

## カナダ留学を終えて

3年 安部 寿理

ウィニペグ大学 (カナダ)

(2012.5.4 – 2012.12.16)

この8ヶ月間のカナダでの留学は、私にとって一生忘れられないものとなりました。大学二年のとき、私はこのままで卒業していいのか、この大学の四年間で、自分は何を頑張ったと言えるのかと悩んでいました。そんなときに興味を持ったのが、長期留学でした。私にとってこの長期留学は、とても大きな決断であり、挑戦でした。私がカナダのウィニペグを留学先にした理由は、ウィニペグ大学の English Language Program (ELP) ではホームステイの制度をとっていて、カナダ人の家族と一緒に生活が出来ること、また様々な国から来た留学生と共に、文化交流を交えながら英語を勉強できることに魅力を感じたからです。

ELP では、speaking と listening に重点を置くクラスと、writing と reading に重点を置くクラスがあり、私はその両方を受けることができました。最初の4ヶ月では、発音や会話力、リスニングを伸ばそうと頑張りました。日本では学べないスラングや独特の言い回し、またプレゼンテーションなどを通して多くのことを学びました。後半の4ヶ月では、様々な文章の構成の仕方やリサーチペーパーなどの書き方、単語や文法に重点を置きました。たくさんの reading と writing をこなし、自分の英語力について、欠けている点や今まで知らなかったスキルを獲得することができました。また、カナダの文化を学ぶことができる POP Culture class、演技することを通して speaking skill の向上を目指す Theatre class など楽しみながら学べる授業もありました。

ELP では、Language Partner というプログラムで、ネイティブスピーカー

の方にパートナーとなってもらい、英語を話し、聞く機会を多く持つというものがあり、とても役に立ちました。さらに、授業以外の時間でも、積極的にカナダ人の友達をつくり、一緒に勉強したり、ご飯を食べに行ったりと、カナダでしか出来ない多くのことにチャレンジすることができました。文化の違いから、様々な場面で驚くことがありましたが、カナダでの生活で困ったことは、特になかったように思います。唯一大変だったのが、ウィニペグの冬の寒さです。10月からすでに雪が降り、最も寒い日で、マイナス28度という日がありました。そのような寒さの中で生活するのは初めてだったので、凍るような寒さは、つらいものでしたが良い経験でした。

カナダに来る前、私の一番の目的は、英語力の向上でした。もちろんそれは、最初から最後まで努力を続け、大きな変化を感じることが出来ます。しかし、今留学をほぼ終えて感じることは、この留学でかけがえのない友達と、もう一つの家族を作ることができたことを本当に嬉しく思います。「ここはあなたの家だよ」と言って本当の家族のように優しくしてくれた



ELP Theatre class is very fun!!  
(後列右端：安部寿理さん)

ホストファミリー、楽しいことやつらいことを共有しいつも助けてくれた友達、そしてこのようなすばらしい経験をさせてくれた親に言葉にできないほど感謝しています。この留学で得た英語力やカナダの文化の知識を、将来の仕事で生かすことができたらと思います。このような経験が出来て本当に良かったです。

## 留学して手に入れたもの

3年 眞田 佳苗

ハイデルバーグ大学 (アメリカ)

(2011.8.22 – 2012.8.31)

英文学科に入ったからには、英語力を伸ばしたい。自分の英語でネイティブの人たちに気持ちを伝えたい。もっと積極的に外国人と話してみたい。洋画の字幕なしで内容を理解したい。辞書なしで洋書が読めるようになりたい。英語がもっと話せれば、もっと理解できれば、もっともっとたくさんの世界を知ることができる。私は大学に入学した当初から、大学4年間での目標は英語力の上達でした。私の留学先、アメリカのオハイオ州にある Heidelberg University は、私立のあまり大きくない大学のため、大学全体がアットホームな雰囲気です。留学生の数が少なく、英語力を伸ばすにはぴったりの学校でした。

期待に胸膨らませながら旅立ち、Heidelberg University の学生の一員となった初めの頃は、とにかく授業についていくのが大変でした。私は History, Art, Physical Education, Non-Departmental and Integrated Studies, Communication, Psychology といった授業を現地の学生と一緒に受けていましたが、当然、ネイティブの先生がネイティブの学生向けにする授業であり、留学生の私が、授業で理解できる箇所はほんの少しあるかないかで、メモをと

るのにもやっとという感じでした。夜遅くまで、図書館やコンピュータ室で課題と向き合う日々もほとんどでした。心が折れそうになりながらも、精一杯それらをこなしていかなければいけない、必死な毎日でした。

なかでも Communication の授業では、大勢の学生の前に立って行うプレゼンテーションをする機会が多く、その都度、決められたテーマで、パワーポイントを作成、原稿をまとめて暗記、正装で発表というもので、毎回緊張しながら出席していました。私は人前に立って話すことが苦手なので、英語で、しかもネイティブの学生が大勢いる前での発表というのは、毎回、心臓がおかしくなるくらい緊張しました。しかし、私の周りには常に、助けてくれるたくさんのアメリカ人の友達がありました。毎日の宿題の手伝いはもちろん、発表の原稿や発音のチェックと練習、テスト勉強も助けてくれました。助けを求めなくても、手を差し伸べてくれる彼らの優しさに励まされたことで、頑張れたのだと思います。

そして何より授業を受けるモチベーションになったのが、友達の授業に対する意欲を目の当たりにしたことでした。日本人の学生は、後ろや隅の席に座りがちですが、アメリカの学生は、前のほうの席から座ります。また、授業中の意見や質問なども、ためらわずに発言する姿にも、発表の堂々とした姿や終わった後に質問が飛び交う様子にも驚きました。

授業を通しての勉強を頑張る一方で、本当に自分の英語力の向上に繋がったのは、友達との充実した大学生活でした。自分で決めたことだから覚悟はしていたものの、日本人1人の環境という状況に、最初のうちは何をすることもビクビクしていました。しかし寮のルームメイトやフロアメイトをはじめ、たくさんの友達が声をかけてくれたり、課題の手助けをしてくれたり、イベントに誘ってくれたり、いろんなことを教えてくれて、寂しくなったり孤独を感じたり、ホームシックにかかるようなことはありませんでした。スムーズに自分の意思を伝えることは難しくても、積極的に多くの友達と関わっているうちに、新しい単語を覚えたり、状況に応じた

返事の仕方や感情表現を覚えたり、耳が慣れて多少早い英語でも聞き取れるようになっていきました。

私がアメリカで学んだいちばん大事なことは、間違いを恐れて話すのをためらったり笑ってごまかしたりすると、相手には何も伝わらないということです。たとえ間違っている、伝わらなくても、話しかけてくれる友達には、会話で応えることが大事だと思いました。今まで知らなかった世界に飛び込んでみて、振り返ってみると、自分にしか分からない成長を感じ、自分にしか分からない世界観が広がったように思います。目標にしていた英語力は、リスニングと単語力がとくに伸びたと思います。自分には今までなかった度胸と自信もつきました。社会に出たときに、この長かったようであつという間だった留学の経験を活かし、関わってくれた大勢の人に感謝しつつ、もっと英語を勉強して世界を広げ、たくさんの人たちと深い交流をしていきたいです。



寮のオリエンテーションでの1枚  
(中列右から3番目：眞田佳苗さん)

## イギリス研修

3年 安孫子 悠紀

私は、もともと海外に行った経験が無かったため、単純に、海外旅行を試みたいという気持ちがありましたが、当初は、日本以外の国に行ってみたいという漠然とした思いだけでした。しかし、大学の授業を通してイギリスの文化に興味を持ち、実際に現地に行って、日本との違いを肌で感じたいという気持ちが強まりました。また、自分の英語で海外の人達と会話してみたいという思いもあり、今回のイギリス研修に参加することにしました。

研修先の語学学校の Milner School では、テキストを使った穴埋めやリスニングなど、基本的には大学で行っているような授業でした。もちろんネイティブの先生の授業なので、私の場合は先生の英語を聞き取るのにとっても苦勞しました。しかし、様々な国の出身のクラスメイトがいるので、それぞれの国の話をしたり、ゲームをしたり、毎日楽しく授業に参加することができました。

授業中に先生が話す英語は、宮城学院女子大学のネイティブの先生方が、私たちの聞き取りやすいように話して下さるのとはスピードが全く違い、先生の言っていることが理解できないことが多々ありました。しかし、その環境の中で過ごすうちに徐々に耳が慣れていき、聞き取れるようになっていくのを、日々、実感することができました。授業では、発言したり会話したりする時間が多かったので、英語で自分の意見を伝える力も身についたと思います。

また、3週間の研修の中で、大英博物館を訪れたことが、大変印象に残っています。歴史を感じられる外観とは違って、館内は、現代的な作りになっ



私のホストファミリー

ていることに非常に驚きました。館内には物凄く沢山の展示品があり、時間がいくらあっても足りないほどです。私は、展示品というよりも、博物館自体の歴史と規模の大きさに圧倒されました。イギリスに行ったら、是非、行くべき場所のひとつだと思います。

今回、この研修に参加し、実際にイギリスで生活してみることで、本や映像だけでは分からないことを学び、経験することができました。このことを軸に、世界には日本とは違った文化、言語、考え方があるという認識を持ち、今までとはまた違った視点でも、物事を考えられるようにしていきたいと思います。

## 海外研修

3年 石澤 佳奈

私が今回、イギリス研修に参加を決めたのは、締め切り間際になってからです。今までは金銭的理由から、海外研修に行くことを諦めていました。しかし、その前の年にカナダへ研修に行った友人に、海外研修のための奨学金があると教えてもらい、決意しました。

向こうでは、Milner School という英語学校に3週間通いました。そこでは、世界各国の生徒が英語を学びに集まっていて、レベルごとに多くのクラスに分けられます。ですので、少人数で自分と同じくらいのレベルの生徒と学ぶことで、コミュニケーションも取りやすく、能力の差を気にせずに楽しく学べました。授業内容は、それぞれのクラスで違いますが、私のクラスでは、主にペアアグループに分かれてゲームをやったり、教科書や資料を使いながら、ライティング、リスニング、スピーキング、グラマーを学びました。授業中、先生に意見を聞かれる機会が多く、またペアアグループ内で意見を交わしながら課題に取り組むので、自分の意見を分かってもらおうように工夫したり、楽しく冗談を交えながら話すことで、スピーキングの能力がとても伸び、クラスメイトみんなと仲良くなることができました。

お昼に授業が終わると、今度は、宮城学院女子大学のみんなで、様々な街や施設を観光します。その他に、自分で事前に申し込んで、コッツウォルズ地方の美しい村を巡るツアーに参加しました。その街は、観光地でありながら人が普通に生活をしているのです。村の住人が、自分たちで家や庭を美しく保っているおかげで、とても美しく、まるで絵画のような景色を楽しむことができました。人々が協力して街の景観を守る姿は、どこか日本人に似ているように思いました。そのツアーで訪れた古い村や城、パ

ブは、まさにイギリスの文化を象徴しているように思えます。現代のビルや建造物が建つ前のイギリスの姿が見ることができ、さらにその中で実際に感じることができる、素晴らしい地域でした。イギリスに行くなら、ロンドンのような大都会だけでなく、田舎町にも是非行くべきだと思います。

今回の研修では、大金をかけ、さらに時間が限られているので、それを無駄にしないように、自分の恥ずかしがりやで奥手な性格を一切封印し、どんどん積極的に行動しました。その結果、決められたプログラム以上の体験ができ、かけがえのない友達も沢山できました。日本では、旅行とは違い、時間は沢山ありますが、この研修での経験を活かし、どんどん自分からいろいろなことを吸収して成長したいと思います。



楽しいクラスでした!!  
(前列右から2番目：石澤佳奈さん)



## 2012 年度基礎セミナー紹介

遊佐典昭

前期の『英語学基礎セミナーⅠ』では、『ファンダメンタル英語学』（ひつじ書房）をテキストに使用し、講義担当者が、英語学に関する基礎的な知識について講義を行うと同時に、受講者が練習問題を解くことで、英語学の基礎知識を身につけた。また、後期の英文レポート作成に備えて、『英作文なんかこわくない』（東京外国語大学出版会）で、英作文の基本を確認した。後期の『英語学基礎セミナーⅡ』では、前期の講義内容を展開した。テキストとして『ファンダメンタル英語学演習』を用い、「動詞と文の要素」「二種類の自動詞」「能動文と受動文の交替」「場所句交替」「与格交替」「自動詞他動詞の交替」の各章を、受講者がグループ発表を行った。発表者には、単に知識を伝えるのではなく、説得力を持つように伝えるにはどのような戦略をとる必要があるか考えることが求められた。グループ発表では、十分な準備をしてきた発表者と、そうでない発表者に大きな相違が見られたので、次年度以降の課題としたい。また、文献収集法、英文レポートの書き方に関する講義を行った。講義に基づき、英文の提出を2回求め、詳細な添削を行い受講生に返却。ここでも、レポートの取り組み方に関して受講生間で大きな差が見られた。しかし、1年を通して、「ことばへの気づき」を通して英語、日本語に対する理解が深まり、自律した学習者の育成に関して、一定の成果をおさめられたのではないかと思われる。

鈴木雅之

2012年度の「英米文化・文学基礎セミナー」では、短い英詩と批評のアンソロジーをテキストに使用。今年度のセミナーの目標は、英語を「読む力」に加えて、「より深い理解力」を身につけることでした。言葉のひとつ一つにこだわり、なぜこの言葉がここで使われているのか等々を考えることで、詩を深く読みこむ訓練を課しました。前期末に長めの日本語レポートを提出してもらい添削。後期は、それをさらに練り上げたものを一人約7分間、日本語による口頭発表を課しました。そして学年最後には、英文レポートを課題といたしました。とりあげた作品は、“The Rainbow”

(William Wordsworth), “Innocence” (William Blake), “Memory” (Thomas Hood), “The Waves” (Alfred Lord Tennyson), “Home Thoughts” (Robert Browning), “Spring and Fall” (Gerard Manley Hopkins), “Mid-Winter” (Christina Rossetti), “To Daffodils” (Robert Herrick) 他。

## 吉村 典子

イギリスの造形作品を取り上げ、言葉で表されていないものを、言葉で表すということを共通の課題に、様々な作品分析を行った。最初は複数の作品をみていくなかで、グループで「気になる作品」について感じることを言葉で表し、意見交換するなかで、作品についての「問題」を提起した。それに基づき調査や話し合いを進め、英文資料を読み、それらも参照しながら、グループでテーマを設定し、口頭発表によるプレゼンテーションの経験を積み上げていった。前期末には、各自の関心をもとに、今度は、個人で資料収集が進められ、調査成果をまとめたレポートが夏休み明けに提出された。

後期はそこから出てきた疑問や関心をもとに、何を議論したいのか、各自でテーマ設定（問題設定）をし、学年末に英文レポートにするためのイントロダクションの書き方の練習を行った。その後は、問題解決のために必要な資料収集やその整理・解釈を進めた。英文レポートでの議論の進め方については、サンプルを参照しながら学び、実際に少しずつ書き進めることにした。受講生の取り組んだテーマは、19世紀の絵画や生活デザインから、近年の景観問題など多岐にわたる。成果は、期末の口頭発表による経過報告をへて、1月末に英文レポートの形で提出される予定である(2013年1月20日現在)。

## 両角 千江子

英米の短編小説を教材として、散文の文学作品を読み、自分の解釈を創り、それを文章で表現し伝達する、というプロセスを体験・理解することを目標としました。

文学作品の研究成果を発表する「論文」の作成は、主観的に自分が知りたいこと、思ったこと、興味を持ったことを出発点として始まります。その問題について多角的に考えを巡らせ、先行研究にも目を配り、そうすることで「感想」を「考察」へと深めてゆきます。すると、論理的整合性を

持つ、客観性を備えた解釈や主張ができてきます。論文とは、それを自分以外の人に伝えて理解してもらおうとする文章です。

別々の主観を持っている私たちが理解しあうためには、共通の道具を用いる必要があります。論文の場合は、その道具とは、「言葉と論理性」です。自分の考えを正確に分かりやすく伝える文章が必要です。あいまいな言葉は誤解を招き、理解を妨げます。また、客観的な論理の整合性が必要です。なぜこのように解釈できるのかという理由を、作品の中の記述を引用して証拠とし、丁寧に順を追って説明します。独創的な内容を伝えつつ、それを理解してもらえるような客観性のある論理的な文章を工夫します。

というわけで、教室では、英文の精読、鍵となる文章の指摘、作品内容の解釈、その文章化、という作業を繰り返しながら徐々に作品とエッセイの難度とを上げてゆきました。

作品の周辺研究、先行研究の調査、英作文練習、については授業に組み込む余裕がなく、全クラス共通の課題である英文レポートについては、一人2枚程度ずつの添削をするに留まりました。

エッセイ・論文を書くときに、タイトル、論題、アウトライン（この三つは同じ内容を示す）をまず準備すること、一つの論文では一つの主張（論題）にしぼること、パラグラフにはトピック・センテンスを入れること、パラグラフも論文も構成は導入・本論・結論の3部からなること、などの知識が4年次に、また卒業後の職場で、お役に立つことを願っています。

## 2012 年度研究・教育活動報告

鈴木雅之

### 研究活動

1. 昨年同様、イギリス・ロマン主義時代の研究に関して、日本と欧米の研究者の人的・学術的交流および協力関係を推進する仕事に関与しています。英国ロマン主義学会（BARS）とは、2012年5月に正式に協定を結びました。また、アメリカのロマン主義学会（NASSR=North American Society for the Study of Romanticism）とも同じ趣旨の提携を結ぶべく、NASSRの理事である Professor Angela Esterhammer (University of Toronto) と交渉中です。
2. The English Association (1906年創立、会員数350名) のフェロー（FEA=Fellow of the English Association）に日本人として初めて選ばれ、The British Academy での祝賀会とシンポジウムに参加しました（2012年5月）。
3. 東北6県をカバーする新しい研究者組織「東北ロマン主義文学・文化研究会」(TARS = Tohoku Association for Romantic Studies) を立ち上げました。第1回研究会を2012年12月、東北大学文学研究科にて開催しました。

### 論文

1. 「顕微鏡の想像力の系譜(2) ——サー・ジョシュア・レノルズからウィリアム・ブレイクへ」  
『英文学会誌』第41号、宮城学院女子大学学芸学部英文学会、2013年3月。
2. “BASIC English Revisited: the Future of Literature in the Japanese Classroom in the 21<sup>st</sup> Century” (with Steve Clark), in *Teaching English Literature in Japan: Practical and Theoretical Perspectives*, eds. Miles Clinton, Paul Hullah et al. (forthcoming)

### 学会発表

1. 「戦争、痕跡、芸術の起源——フェリシア・ヘマンズとワーテルロー詩」、日本英文学会東北支部大会シンポジウム：「英文学におけるつわものどもが夢の跡——イングリッド内戦から第一次世界大戦まで」（2012年11月18日、岩手県立大学）

## 社会活動

日本学術会議連携会員  
日本英文学会東北支部理事  
イギリス・ロマン派学会理事  
『試論』編集委員

## 科学研究費の受領

1. 顕微鏡と 18-19 世紀イギリス文化の研究（基盤研究 C、代表）
2. ロマン主義時代の旅行記とその歴史的背景——国家意識・国民意識の変容を中心にして（基盤研究 B、分担）

## 教育活動

「英米文学作品講読」では、*A Flower Garden of English Poetry* に収められた 40 篇をこえる短い詩を、毎回数名の当番を決めて発表してもらいました。英語を文法的に正しく読み日本語に訳すこと、それぞれの詩作品の「うまみ」を感じ取ること、そしてそれを相手に分かるように日本語で的確に表現することを発表者には課しました。「英文学史 I、II」では、時代の流れ（政治・経済・宗教）と文学作品の相関関係に注意しながら、Chaucer から T. S. Eliot までを前期と後期とに分けて講義しました。「英米文学・文化研究セミナー」では、アメリカを代表する女性詩人 Emily Dickinson (1830-86) の詩を読みました。ときどきシュールな表現を好むこの詩人の真意は何かをめぐって、ときには講義時間一杯を費やして議論しました。各自の「詩」の理解を的確に相手に伝わる言葉で表現することをテーマといたしました。

遊佐典昭

## 研究活動

- (1) 第 143 回日本言語学会大会大会（大阪大学）で共同発表を行った大滝宏一・杉崎鉦司・遊佐典昭・小泉政利「カクチケル語における項削除の可否について」が大会発表賞に選ばれ、第 144 回大会（東京外語大学）で授賞を受けた。

[http://www3.nacos.com/ljsj/modules/documents/index.php?cat\\_id=167](http://www3.nacos.com/ljsj/modules/documents/index.php?cat_id=167)

- (2) 論文は、国内外から 3 本出版された。また、研究発表は国内外で、共

同発表を含め 8 本行った。

- (3) 科研の成果をまとめた論文を投稿する準備を行っている。
- (4) 東京言語研究所で、大学教員、大学院生、高校教員向けに最近の研究成果に基づいて、「生成文法からみた第二言語獲得研究 - 日本人英語使用者（学習者）の諸問題」と題した集中講義を行った

## 論文及び著書

1. 遊佐典昭 「言語の脳科学：感受性期以降の統語発達を中心に」 *KLS 32: Proceedings of the Thirty-Sixth Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, pp. 323-333. 関西言語学会
2. Otaki Koichi and Noriaki Yusa “Quantificational null objects in child Japanese” *Proceedings of the 5<sup>th</sup> Formal Approaches to Japanese Linguistics: MIT Working Papers in Linguistics*. pp. 217-230. Massachusetts Institute of Technology
3. 遊佐典昭 「普遍文法」『第二言語習得と英語科教育法』 pp.78-91, 開拓社

## 研究発表

1. 遊佐典昭 「第二言語獲得研究の新たな展開」慶応言語学コロキウム、2012 年 5 月 12 日（招待講演）
2. 遊佐典昭 「生成文法に基づいた第二言語獲得研究は、英語教育に貢献できるのか」第 84 回日本英文学会シンポジウム「言語理論からみた第二言語獲得研究——英語教育との接点を求めて」、2012 年 5 月 26 日、専修大学
3. Ono, Hajime, Miki Obata & Noriaki Yusa. “Interference and subcategorization information: A case of pre-verbal NPs in Japanese,” *Formal Approaches to Japanese Linguistics 6 (FAJL-6)*. ZAS/Humbolt University, September 28th, 2012
4. Sugisaki, Koji, Koichi Otaki, Noriaki Yusa & Masatoshi Koizumi, “The Acquisition of Word Order and its Constraints in Kaqchikel: A Preliminary Study,” *Generative Approaches to Language Acquisition in North America (GALANA) 2012*, October 13th, 2012, University of Kansas
5. Noriaki Yusa and Snape Neal “Articles in L2 English: Can instruction improve learners’ perception of articles?” *Second Language Research Forum 2012*, October 19th, 2012, University of Pittsburgh
6. 杉崎鉦司・大滝宏一・遊佐典昭・小泉政利 「カクチケル語における語

順の制約の獲得について」ワークショップ「カクチケル語の理解と産出と獲得」、2012 年 12 月 8 日、広島大学

7. 遊佐典昭「第二言語獲得研究と関連領域」2013 年 2 月 19 日、広島大学（招待講演）
8. 遊佐典昭「脳科学からみた第二言語獲得」、2013 年 2 月 28 日、群馬県立女子大学（招待講演）

## 社会活動

1. 日本英語学会評議委員
2. 東京心理言語学会顧問（査読委員を兼ねる）
3. 日本第二習得学会顧問
4. 言語科学学会企画委員
5. 慶応義塾大学言語文化研究所研究員
6. *Generative Approaches to Language Acquisition in North America 2012* 査読委員
7. 高校生向けにキャリアセミナーを行う（山形市）

## 研究費の受領

1. 科学研究費補助金（基盤研究 S）[分担]（2012 年 4 月—2013 年 3 月）
2. 科学研究費補助金（基盤研究 A）[分担]（2012 年 4 月—2013 年 3 月）
3. 科学研究費補助金（基盤研究 B）[分担]（2012 年 4 月—2013 年 3 月）

## 教育

### 学部

『ことばと人間 1, 2』『英語音声学 1, 2』『心理言語学 1, 2』『英語学基礎セミナー 1, 2』『卒業論文セミナー』を担当した。講義、セミナーとも、受講生に言語研究の醍醐味を伝えるようにした。

### 大学院

『英語学特殊講義Ⅲ（心理言語学）』を担当した。担当教員が、言語理論の観点から、第二言語使用者（主に日本人英語学習者）が有する言語知識の特質を解説した。

## 学外非常勤

宮城教育大学教育学部（集中講義）

首都大学東京（集中講義）  
東京言語研究所（集中講義）

## その他

英語イマージョン教育に関して *The Japan Times* からの取材をうける。  
<http://www.japantimes.co.jp/text/fl20120731a2.html>

木口寛久

## 研究活動

昨年度から科学研究費補助金（基盤研究C）を3年間受領することができ、新たな国際研究プロジェクトを代表として立ち上げることが出来ました。当該プロジェクトの海外共同研究者とともに執筆中の論文も完成し、投稿中です。

また、日本英語学会学会誌 *English Linguistics* に書評が掲載されました。

## 論文

<書評>

Hirohisa Kiguchi (2012) Review of Cedric Boeckx, Norbert Hornstein, and Jairo Nunes (2010) *Control as Movement*, Cambridge University Press. *English Linguistics* 29.2. 458-467, The English Linguistic Society of Japan.

## 教育活動

Grammar 1, 2、英語学講読 1, 2、生成文法 I, II、卒業論文セミナー I, II、英語学特殊講義 I, II（大学院）の授業を担当しました。

## 社会活動

1. The 26th A.T.E.L Short Play Contest（東北地区大学の ESS による英語劇のコンテスト）の審査員を務めました。（2012年6月10日 於：東北学院大学）

## 科学研究費の受領

1. 再構築現象に関わる第一言語獲得論：その理論的・実証的研究  
科学研究費補助金（基盤研究C、代表 2011年4月－2014年3月）

## 吉村典子

### 研究活動

イギリス住空間研究の中で、ここ数年は 19 世紀の「家」の概念と形象の変容に着目した研究を進めている。その成果の一部として本年度は以下のような口頭および論文発表を行った。また、広くデザインに関する雑誌編集に携わった。その他、イギリス文化に関わる展覧会企画運営を行い、展示は国内 2 か所（愛知と東京）を巡回するに至り、関連図書の出版研究成果の講演を行った。

### 論文

Noriko Yoshimura, "The Identity and Design of the Modern British Home under the Influence of the 'Feminine Territory' and Japanese Art," *Design Frontiers: Territories, Concepts, Technologies*, Blucher, 2012.

### 出版

吉村典子『ミントンのタイル』、INAX ライブミュージアム、2012 年 4 月

### 編集

『デザイン理論』 60 号 意匠学会（2012 年 9 月）

### 学会発表

1. 吉村典子 「芸術と地域——英国都市再生の事例から」 藝術学関連学会 連合第 7 回公開シンポジウム「地・人・芸術—<芸術と地域>を問う—」（仙台市博物館、2012 年 6 月）
2. Noriko Yoshimura, "The Identity and Design of the Modern British Home under the Influence of the 'Feminine Territory' and Japanese Art" (ICDHS 2012–8th Conference of the International Committee for Design History & Design Studies, São Paulo, Brazil, September 2012)

### 講演

吉村典子「ミントンのタイルと 19 世紀の“新しい”暮らし」（世界のタイル博物館、2012 年 4 月）

## 社会活動

意匠学会『デザイン理論』60号 編集委員長

意匠学会『デザイン理論』61号 査読委員

展覧会「ミントンのタイル 一千変万化の彩り」企画実行（世界のタイル博物館・常滑、渋谷ヒカリエ・東京）

## 科学研究費の受領

「アーツ・アンド・クラフツと民藝：ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心とした比較研究」（基盤研究 A）

## 教育活動

大学院および学部の担当授業での教育活動の他に、学科専任教員全員と本学大学院修了生とともに、学部生の基礎英語におけるリメディアル教育の運営に携わった。中でも、直接教育運営にあたった桑野明子さん、山口梓さん（大学院修了生）等は、きめ細かなコミュニケーションを取りながら学部生指導にあたってくださった。活動の報告とともに、修了生の皆さんにはこの場をかりて感謝の意を表したい。

John Wiltshier

## 研究活動

I believe a well-designed EFL programme should include five things; *input, output, fluency practice, focus on form and sufficient time*. After spending the last three years writing commercially published textbooks with these goals in mind, this year I have been experimenting with ways to increase the amount of comprehensible input Miyagi Gakuin students receive and ways to increase their known English vocabulary. An extensive reading programme, an online listening course and a 10 minutes a day online vocabulary learning program were established. In the latter, students were aiming to increase their known vocabulary by 2000 words over the year. For the results of the extensive reading programme see the report titled; “*Increasing comprehensible input through Extensive Reading*” in this publication.

In addition to the above, in May I spent three days in Kuala Lumpur as a consultant working with the Malaysian Ministry of Education on planned reforms

to their English National Curriculum. I was also fortunate enough to be able to visit a primary school in the city, talk with the head teacher and observe English classes there. I would like to thank the Malaysian Government and all the kind people I met for their warm hospitality.

### 学会発表

1. Wiltshier, J. (2012, December). 4 Good Ways to Motivate Children and 1 Bad One! A presentation at Nellie's ELT Festival, Tokyo.
2. Wiltshier, J., Helgesen, M., Cooke, S. & Rawson, T. (2012, October). Dramatizing, Transcribing & Moodling, *Firsthand*. A presentation at JALT International Conference, Hamamatsu.
3. Wiltshier, J. (2012, December). 4 Good Ways to Motivate Children and 1 Bad One! A presentation at Pearson Teachers Conference, Osaka.
4. Wiltshier, J. (2012, December). 4 Good Ways to Motivate Children and 1 Bad One! A presentation at Pearson Teachers Conference, Tokyo.
5. Wiltshier, J. (2012, December). Idea - the first key factor in writing materials. A presentation at JALT, Sendai.

### 講演

1. Wiltshier, J. (2012, October). Materials Writing: Seven Key Factors. A 90 minute presentation at JALT International Conference, Hamamatsu.
2. Wiltshier, J. (2012, October). ELT Publishing and You. A 60 minute presentation at JALT International Conference, Hamamatsu.

### 情報

1. Wiltshier, J. (2012, September). Why doesn't this work? Piloting. A short featured article posted on JALT Materials Writers Special Interest Group web site <http://www.materialswriters.org/index.php/featured-article>
2. Wiltshier, J. (2012). Material Writing: 7 Key Factors. *The Language Teacher*, 36(4), 35-37.

### 海外研修

Prof. Suzuki and I took 19 students for 3 weeks to London. The students all had homestays in Wimbledon, South London. Each morning students attended English classes held at Milner School of English with students from a variety of

other countries. Each afternoon was spent sight-seeing in London or taking part in cultural activities. It was an excellent trip and I am looking forward to next time.

## 2012 年度 英文学科講義題目

### 英文学科専任教員

#### 木口寛久

Grammar  
生成文法  
英語学講読  
英語学基礎セミナー

#### 鈴木雅之

文学作品講読  
イギリス文学史  
英米文化・文学基礎セミナー  
英米文化・文学研究セミナー

#### John Wiltshier

Listening  
Speaking  
Intermediate Reading  
Intermediate Listening  
Intermediate Speaking  
Overseas Study Preparation  
児童英語教育

#### 吉村典子

イギリス文化史  
Translation  
英米文化・文学基礎セミナー

#### 遊佐典昭

ことばと人間  
英語音声学

心理言語学  
英語学基礎セミナー

### 非常勤教員

#### 阿部裕美

Intermediate Reading  
英米文化・文学研究セミナー

#### 千種眞一

英語の歴史  
社会言語学

#### Simon Cooke

Listening  
Speaking  
Intermediate Listening  
Intermediate Speaking

#### 藤田 博

英米文化・文学研究セミナー

#### 福地和則

Grammar  
英語教材研究  
英語科教育法 (3年生)

#### Jim Grace

Listening  
Speaking

**ロバート・グリーン**

アメリカの生活と文化  
Translation

**飯塚久栄**

英米演劇の世界  
英米文学研究（17-18 世紀）

**金子義明**

Advanced Grammar  
英語学セミナー

**菅野幸子**

文化交流論

**金 情浩**

英語学セミナー  
外国語としての日本語

**小泉政利**

日英語比較文法論  
英語学セミナー

**越川芳明**

英米マスメディア論

**久保田佳克**

Reading  
Intermediate Writing

**熊谷優克**

Current English  
英米文化・文学研究セミナー

**Bruce Leigh**

Business English  
Intermediate Writing

**Adrian Leis**

Speaking  
Intermediate Writing

**増富和浩**

英語学セミナー

**Richard Meres**

Writing  
Business English  
Intermediate Listening  
Intermediate Speaking

**Gerald Muirhead**

イギリスの生活と文化  
Intermediate Listening  
Intermediate Speaking

**両角千江子**

英米小説の世界  
アメリカ文学史  
英米文化・文学基礎セミナー

**丹羽隆昭**

英米文学研究（19-20 世紀）

**岡田 毅**

語法研究  
コーパス言語学

**佐々木誠逸**

Writing  
Intermediate Reading

**Joanne Sato**

Listening

**島 越郎**

Advanced Grammar

**清水菜穂**

アメリカ文化史  
英米文化・文学研究セミナー

**鈴木美津子**

英米文化論講読  
英米文化・文学研究セミナー

**高橋晶子**

Reading  
Writing

**Anne Thomas**

Reading  
Writing  
Intermediate Writing  
Discussion Seminar

**渡部友子**

英語科教育法 (2年生)

**Matthew Wilson**

Business English  
文化研究 (オーストラリア・カナダ)

**横山 匡**

文化交流論

**舌津智之**

英米文学研究 (19-20 世紀)

## 2012 年度 英語英米文学専攻講義題目

### ✧ 英文学科専任教員 ✧

**木口寛久**

英語学特殊講義（統語論・意味論）

**鈴木雅之**

英文学演習

**吉村典子**

修士論文演習

**John Wiltshier**

英語学演習（児童英語教育）

**遊佐典昭**

英語学特殊講義（心理言語学）

### ✧ 非常勤教員 ✧

**Bruce Leigh**

英語アカデミックライティング

**金 情浩**

英語学演習（心理言語学）

**清水菜穂**

文化交流論演習

## 2012 年度卒業論文題目

### ※ 遊佐ゼミ (英語学)

後藤 美穂 …… Why is It Difficult for Japanese L2 Learners of English to Acquire the Article System?

砥石 梨永 …… Overgenerated *Be* Forms in SLA

### ※ 木口ゼミ (英語学)

阿部明日香 …… A Difference Between the *Tough* Movement and the *WH-* Movement

### ※ Wiltshier ゼミ (英語学)

北村 奈緒 …… Using Digital Resources to Teach English to Japanese Elementary School Students: A Case Study

### ※ 鈴木ゼミ (英米文化・文学)

大風 未央 …… 『不思議の国のアリス』におけるパロディ詩

沼田 千鶴 …… 妖精とアイルランドから見るウィリアム・アリンガム

八重樫瞳子 …… クリスティーナ・ロセッティ研究

—「ゴブリン・マーケット」における姉妹と妖精ゴブリンの一考察—

石倉 洋子 …… Robert Burns 愛の詩

—幾多の恋愛の果てに、彼が求めた女性観—

尾形未沙保 …… Wordsworth's View of Nature

### ※ 吉村ゼミ (英米文化・文学)

小室 美沙 …… ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティと三人のモデル

—女性描写から見る理想美—

菅野沙友里 …… フランク・ロイド・ライトと日本

—落水荘に見る日本性—

高橋 美帆 …… ミレイとウォーターハウスから見るオフィーリアとい  
う女性

武山 暁子 …… マッキントッシュのデザインとティールーム文化

西木 純 …… The Textiles of William Morris

兔原 里沙 …… 風刺画から見る 18 世紀イギリス社会

—ホガス作品を通しての考察—

荻野あゆ美 …… イギリスのセツルメントと地域づくり

建藤 美緒 …… Elizabeth I and Her View of Marriage

櫻井英理子 …… 「パンク」という現象

—1970 年代の若者文化とその後の変容—

菅原 愛 …… BIBA とはなにか

—1960 ~ 70 年代のデザインと社会—

★ 両角ゼミ (英米文化・文学)

太田 裕美 …… The Neglected Character: Auntie—A Reading of *Ceremony*

by Leslie Marmon Silko—

後藤 諭美 …… ブロムデンが伝えるもの

—ケン・キージーの『カッコウの巣の上で』の一解釈—

千葉美香子 …… 幻想と現実の葛藤

—David Henry Hwang の *M. Butterfly* を読む—

★ 清水ゼミ (英米文化・文学)

泉山 佳子 …… ニューヨークの芸術家に対するジェントリフィケー

ションの実情

- 木村 真依……………Various Struggles of Japanese-Americans
- 佐藤 千夏……………Mary Lyon の教育理念  
—Mount Holyoke Seminary の設立と発展—
- 庄子 未紗……………Jean Webster’s Image of Orphans and Orphanages through  
*Daddy-Long-Legs* and *Dear Enemy*
- 平間 純子……………Attractive Personality of Ray Kroc: His Influence on McDon-  
ald’s
- 関 佳奈子……………日系二世のモデル・マイノリティまでの歩み  
—教育による日本的価値観とアメリカ化—

## 2012 年度修士論文題目

※ 指導教員 吉村・鈴木

- 伊藤 睦……………抵抗の喜び 一家父長制に対するアリス・ウォーカーの  
思想—



TOEIC

—私の勉強法—

## 色々試して、自分に合った勉強法を・・・

4年 平間 純子

TOEICスコア：805

「英文学科生なのだから、TOEIC800点は欲しいなあ～」と思い、大学3年から勉強を始めました。といっても、長時間机に向かって黙々と勉強していたわけではありません。飽きやすい性格の自分でもこなせるようにと、「この方法なら飽きずに続けられるかな～」と思いついた事を手当たり次第行っていました。

夏休みの間に1カ月ほど短期留学をした経験はありましたが、長期留学をした経験は無かったので、とにかく「日本にいても英語を使う環境・機会」を自分なりに設けるよう心がけました。

以下、思いつき次第実践してみたこと。

- ① 寝る前に、一日起こった事、頭にきた事、嬉しかった事などを壁に向かって一人でべらべらと英語で話す。(何でもいいです。大学・アルバイトの事など。)
- ② 家にいる時は、英語で話す。(最初は家族にびっくりされますが、すぐ慣れますよ。)
- ③ 洋画を英音・英字幕で見る。(最初は、何度か見たことのある映画で実践してみるといいと思います。ディズニー映画は比較的聞きとり易いのでお勧めです!) 私は、大好きなミュージカル映画を良く見ていました。そして、分からない単語があれば辞書を引き、気に入ったフレーズがあれば、その場でなりきって真似していました。声に出すと覚えます!
- ④ 好きな洋楽を聴く→歌詞を訳してみる(分からない単語は調べる)→熱唱する。

- ⑤ 国際交流イベントに積極的に参加する。
- ⑥ CNN や ABC News を見る。
- ⑦ 大学の友人と英語で MAIL する。

とまあ、このような感じで実践していました。とはいっても毎日ではなく、「思いついたら・気がついたらやる！」というふうにマイペースに勉強していました。また、自分には合わない勉強法だと感じたら、すぐやめました。そして上記で覚えた単語や言い回しが、実際にネイティブの方に通じるのか確認するため、ESL で実際に話していました。机に向かって文法や単語を勉強し、In-Put する事も大切ですが、それらを Out-Put する事も重要だと思います。言語を勉強するには、どちらも欠かせないと思います。

勉強方法の合う・合わないは、人それぞれだと思うので、とにかく色々試して皆さんが自分に合う方法を見つけて勉強する事が一番良いと思います。その中で、In-Put と Out-Put をする時間をバランス良く設ける事が重要だと思います。

私自身、990 点への壁は厚く高いので、今後ともより高いスコアを目指し卒業後も勉強を続けていきたいと思っています。

## 私の TOEIC 学習方法

4 年 木村 真依

TOEIC スコア：785

私が今もずっと TOEIC を受験する理由は、自分のその時々英語力の確認と、モチベーションアップのためでした。TOEIC を受験する一カ月前くらい前からは、TOEIC 受験を意識するようにし、日々の中でより英語を使うように努力しました。私は特にリーディングパートが苦手なので、

英語の文章をよく読むように意識しました。そして分らない単語は持ち歩いている単語ノートに書き留め、いつも思いついた時に確認するようにし、一つでも多くの単語を覚えるように心がけました。やはり TOEIC は、問題にでてくる単語を知っているのと知っていないのとで、かなりの点差がつくと思います。短期的に TOEIC の点数を伸ばしたいのであれば、たくさん単語をひたすら暗記するのが、一番手っ取り早いと思います。私の苦手分野を克服するために、そしてもっと点数を伸ばすことが出来るように、特にリーディングパートに重点を置いて、これからも精進していきたいと思っています。

それと、今私は4年生になり就職活動を終えましたが、自分の就職活動の体験を経て、TOEIC のある程度の点数を持っていることが、アドバンテージになると知りました。というのは、就職活動をする時に、TOEIC である程度の点数を持っているのと持っていないのでは、かなり差がでるということです。私が面接をした時には、偶然か、必ず TOEIC の点数について面接官の方から何かしらお言葉をいただきました。私がどれくらい英語をしゃべれるか、面接官の方は見たことも聞いたこともありませんが、TOEIC の点数のある程度の点数を持っていれば、かなりの好印象であると思います。ですので、私たちは英語を専門に勉強していますし、年に2回も学校で TOEIC を受験する機会がありますから、ぜひその機会を使って、自分の将来のために、ある程度の点数を取るよう努力した方が、必ず全員に訪れる就職活動の際に、自分の自信にも繋がると思います。

## 「好きなもの」から英語を学ぶ

3年 沢田 千咲

TOEIC スコア：755

私は、今回 TOEIC を受験するに当たって、準備する時間が思うように取れなかったことから、特に問題集を使う等の対策を行うことができませんでした。それでも、過去のスコアで最も良い結果を出すことができたのは、以下に述べる2つの点に気をつけていたからだと思います。

まず1つ目は、テンポよく解くということです。TOEIC を一度でも受験されたことのある方は、リスニングの速さや問題量の多さ、それに試験時間の長さによって圧倒されてしまったでしょう。私もそうでしたが、試験時間は長いのに、リーディングセクションで最後まで解き終わらないという方もいらっしゃるかもしれません。私は今回、今までの経験を活かして、時間を意識して問題を解きました。具体的に言うと、リスニングはその都度答えをマークするのではなく、印だけつけて最後にまとめてマークするようにしました。これだけで、リスニングのスピードに呑み込まれることなく、落ち着いて回答できたので、とてもおすすめです。リーディングでは、すぐに答えが分からないものは、飛ばして分かるものから解くようにしました。これで、最後の方にもある難易度の低い問題を取りこぼさずに、回答することができたと思います。

2つ目におすすめしたいのは、「好きなもの」を英語学習に変えていくことです。TOEIC は、よくテクニックが大事と言われます。しかし、それで一時的に高スコアを取ることができる人と、本当に英語の実力を持っている人は、違うと思います。私は、後者になりたいので、TOEIC の勉強をする時間を取れなくても、日常的に英語に触れる時間をもつように心掛けていました。色々試行錯誤しましたが、一番効果があったと実感で

きたのは、好きなことを英語の勉強に利用することです。私の場合、それは、ディズニーとハリー・ポッターでした。iPod にたくさん英語のディズニーの曲を入れ、通学時間にずっと聴いていました。映画をDVDで見るときは、音声や字幕、または両方を英語に切り替えたりしていました。また、ハリー・ポッターやくまのプーさん、『不思議の国のアリス』の原書を読んでみたりもしました。自分が予めストーリーを知っているものを扱うので、英語の方に集中することができます。知らない語彙もいちいち辞書を引かなくても、意味を想像しながら読み進めることができます。TOEIC のリーディングでも、この単語の意味を予想しながら読む力は、大いに役立ちます。楽しく続けられるので、本当におすすめです。例えば、音楽が好きな方は、洋楽をただ聴き流すだけではなく、歌詞をインターネットで調べて意味を考えたり、自分で歌えるようになるくらいまで集中して聴くといいかと思います。Taylor Swift の音楽は、ペースもゆっくりですし、歌詞も聞き取りやすいので、取り組みやすいと思います。

今回の結果から私は、新たに卒業までに 860 点以上取るという目標を設定しました。これからも引き続き勉強を続け、目標を達成したいと思います。

## 私の TOEIC の勉強法

1年 金子 瑞季

TOEIC スコア：630

私の TOEIC の勉強法は、あまり参考にはならないと思います。バイトやほかの試験の方を優先していたので、あまり勉強の時間が取れずすごく悔しい思いをしました。ただ TOEIC を受ける前に必ず一回は、過去問を解いてみて、実際に問題全体がどのような感じなのかをわかっておいた方

が良いと思います。私の勉強法としては、以下の点を気を付けて、TOEICの過去問を実際に解いてみたことです。それを、リスニングとリーディングとわけて述べたいと思います。

まずリスニングの問題は、先に必ず質問を読んでおくことをお勧めします。質問があらかじめ記されていない応答問題では、疑問詞から始める問題か、肯定・否定を尋ねる問題かを判断し、それに焦点をあてながら聞きます。疑問詞や助動詞が聞こえたとしても、依頼や勧誘など相手の意見を聞く場合もあるので、ただ疑問詞から始まったからといって、時や場所の書いてある選択肢を選ぶのは避けたほうが良いです。Part3 や 4 の問題は、あらかじめ問題文や選択肢が記されているので必ず先に読み、人物が出てきたら会話文、出てこなかったらニュースやスピーチなどの問題かをざっと把握します。もちろん、質問に人物がでてきたら、その人に焦点を当てながら聞きますが、選択肢にも目を通し、重複されている単語が出てくれば、それをキーワードとして話題を予測し、内容を聞いたほうが良いと思います。同様に、会話文以外でも、質問に商品や知らせという単語がでてくれば、広告やニュースなどある程度予想ができます。どちらも3つある質問の関連性を探し、どのような問題なのかをあらかじめ考えておいたほうが良いと思います。

リーディングの問題は、単語の知識がなくても文法の知識があれば解ける問題があるので、短期間で新しい単語たくさん覚えるよりは、文法を見直しておいたほうが良いと思います。しかし、単語は、日頃から勉強しておくべきだったと反省しました。文法を見直すことの例としては、関係代名詞や分詞などの TOEIC で狙われやすい項目や、どの名詞が単数形・複数形を導くのか、どの動詞が第3文系・第5文系をとるのかななどを、高校のころに使っていた参考書などで見直しておくとういのはと思います。Part7 では、必ず本文のタイトル、トピックセンテンス、問題文、本文の順番で読んでおいた方が良いでしょう。タイトルやトピックセンテンスを讀ん

で、大体どのようなトピックなのかを推測し、その後で、問題文を読み、どの情報が必要なのか念頭に置き、問題を解いていきます。本文を全部読んでから問題を解くと時間がかかり効率が悪いので、本文を読みながら問題を解いていくことをお勧めします。

英文科の人なら授業などで英語に親しんでいると思うし、私もそんな感じなので、日頃から目立ってこんなことをしていますというのはありません。TOEIC は、長期間勉強すれば点数が伸びると思うので、日頃から、TOEIC に関するアプリや英文学科図書室にある参考書などで対策しておく良いと思います。

## TOEIC 勉強法

1年 大内 亜梨沙

TOEIC スコア：610

今回私が受験したのは、9月23日に行われた公開テストである。人生初の TOEIC 試験であったため、勉強法もまだ確立していなかったが、とりあえず、ほぼ毎日問題集を開いていたように思う。

TOEIC の勉強を本格的に始めたのは、試験の1ヶ月ほど前からだ。初めに解いたのは、2時間の本番の試験が10分に縮められているという小さな模試で、書店の TOEIC 問題集評価本にランクインしていたものである。問題量は、1回分あたりとても少なかったが、Part1 から Part7 までカバーされており、何より TOEIC を受けたことが無かった私にとって、試験の大体の流れを掴める良い問題集であった。この問題集は、1週間に1回分ほど解き、わからなかった単語を全てメモ帳に書き出し、それをどこにでも持ち歩き覚えるようにした。その他に解いたものは、文法やリスニングに特化されており、テクニックについても書かれている問題集だ。

単語に関しては、私は昔から自分が語彙に弱いことを知っていた。今まで日常会話は問題なかったものの、TOEIC に出てくるようなビジネス単語を使う機会などほとんどなく、TOEIC の問題集を解いていてもつまづくのは必ずといっていいほど語彙であった。そこで前述したとおり、毎日自分で書いたメモ帳を持ち歩いたり、分厚い単語帳を時間のあるときに読んだりしていた。その他に、TOEIC の勉強を通して覚えた新しい単語を英会話の授業で出来るだけ使い、アウトプットするよう心がけた。

リスニングの対策では、スマートフォンで公式の TOEIC のアプリをダウンロードし、毎晩寝る前になるべく聴くようにはしたが、実際のリスニング形式ではないこと、寝る前ということもあり頭が朦朧としていたり、実際効果があったのかは残念ながらよくわからない。

試験 1 週間前には、本番と同様、1 回 2 時間で模試を 2 回分解き、ぎりぎりまで単語を覚え、さらに 3 日前くらいではあったが、問題集にまとめられていたコロケーションに一通り目を通した。その頃には、TOEIC に出てくる問題文では語彙で苦勞することはあまり無かったように思う。しかし、実際にスコアシートが届き結果をよく見てみると、「語彙」の面で得点が受験者の平均を下回っていたため、やはり私はまだ語彙が足りないのだと強く感じた。

11 月にもまた TOEIC を受験するため、出来る限りのスコアアップを目指して、日々努力したいと思う。

# 編集後記

『英文学会誌』第41号をお届けします。ご寄稿いただきました方々にお礼申し上げます。今号には、論文3本、エッセイ1本を収めることができました。英文学科生の活動記事として、ESLに加え、MOS(パソコン操作の技術力を競う国際大会)体験記、さらに海外長期留学報告と海外研修報告を掲載しました。若い時の留学は何ものにも代え難いものです。昨夏、ウィンブルドンでの研修旅行に同行しました。出発前の不安顔が3週間後にはすっかり自信顔に変わったこと、その柔軟な適応性は嬉しい驚きです。

いささか旧間に属しますが、Chris Huston 先生が2011年4月をもって退職されました。4月から、遊佐典昭先生は1年間のサバティカルに入れ、アメリカ文学をご専門とする田島優子先生が九州から新たに英文学科に加わります。

『英文学会誌』は英文学科のホーム・ページでも公開しますので、インターネット上で読むことが出来ます。

第41号も副手室の阿部ひとみさんと齋藤千尋さんには、編集の段階で大変お世話になりました。

(2013年2月20日 編集委員 鈴木雅之)

## 執筆者紹介

本田 康典	宮城学院女子大学名誉教授
鈴木 雅之	宮城学院女子大学教授
John Wiltshier	宮城学院女子大学准教授
高橋 晶子	宮城学院女子大学非常勤講師

## 編集委員

遊佐 典昭  
鈴木 雅之  
John Wiltshier

## — 英 文 学 会 誌 第 41 号 —

発行	2013 年 3 月 10 日
編集	代表 遊佐 典昭
発行所	宮城学院女子大学学芸学部 英文学科 英文学会 仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1番1号 電話 (022) 279-1311 (代)
印刷所	プリントコープ KOPAS 電話 (022) 727-1760